

特集

2 特集 1 生徒指導

つながり、深める「部活」指導

- 3 **対談** **現場から見る部活動運営の現状と課題**
生徒指導、人間関係——部活動の意義を支える体制づくりが急務
東京大大学院教育学研究科助教 **西島 央** × 東京都世田谷区立千歳中学校教諭 **長島 章**
- 4 **Column** **中学校での部活動の基本的な考え方**
日本中学校体育連盟専務理事◎三辻陽夫
- 8 **学校事例 1** **東京都 世田谷区立千歳中学校**
「顧問」と「管理顧問」の役割を明確化、保護者の協力で部活が活発に
- 10 **学校事例 2** **東京都 新宿区立四谷中学校**
すべての部に顧問を複数配置、教師の負担が軽減
- 12 **インタビュー** **今後の「部活」指導**
グローバル社会に向けて、部活動の意義を今こそ問い直す
中央大文学部人文社会学科教授◎古賀正義
- 14 **注目データ** **部活動の現状と課題**



18 特集 2 新学習指導要領

新学習指導要領、ここが変わる

- 21 **研究者の視点** **指導の鍵は「活用」「探究」を授業にどう落とし込めるか**
国立教育政策研究所初等中等教育研究部長◎工藤文三

24 特集 3 キャリア教育・進路指導

兵庫県「トライやる・ウィーク」に学ぶ 職場体験の実践ポイント

兵庫県教育委員会／篠山市立今田中学校／西宮市立大社中学校

特別取材 **フィンランドメソッド第一人者に聞く**

子どもたちの「読解」の力を育てる フィンランドの授業

P.30 教科書編纂者・元ヘルシンキ大学附属小学校教師◎メルヴィ・バレ



連載

- 15 **教える「現場」、育てる「言葉」** **新連載**
「これしかない」と信じるのが一流への道につながる
日本陸上競技連盟理事◎高野 進
- 22 **明日から使えるICT講座** **新連載**
第1回 教材の提示 メディア教育開発センター教授◎中川一史
- 28 **10代のための「学び」考**
久保正彰 日本学士院長◎学問に情熱を燃やし続けた先人の想いを解き明かす
- 34 **地方分権時代の教育行政**
岡山県総社市 小学校英語へのサポートを軸に小中連携を深化させる
- 36 **編集後記**

本文中のプロフィールはすべて取材時(2008年3月)のもので、本誌記載の記事・写真の無断複写、複製および転載を禁じます。

特集

1

つながり、 深める。 部活指導

3月に告示された新学習指導要領では、部活動の意義や留意点が初めて総則に盛り込まれた。教師の任意の指導と善意に支えられてきた部活動は、今、生徒数の減少や外部指導者との連携など多くの課題を抱えている。学校教育の一環としての部活動を、教師がどのように捉え、指導していくべきかを考える。



生徒指導、人間関係 部活動の意義を支える 体制づくりが急務

東京大大学院教育学研究科助教

西島 央^{ひし}

× 東京都世田谷区立千歳中学校教諭

長島 章

(4月より首都大学東京准教授)

教育課程外の任意の活動でありながら、9割を超える中学生が参加している部活動(注1)。多くの教師がその意義を認めるが、顧問として指導する場合の考え方はさまざま。そこで、部活動に詳しい西島央先生と運動部の顧問をしている長島章先生に部活動指導の現状と課題を語ってもらった。

生徒を多面的に見る視点が 生徒指導の効果を高める

西島 私たちの研究グループは2007年の夏に「部活動の指導・運営に関するアンケート」(P.14参照)を実施しました。その報告書の中に、生徒は何を楽しみに部活動をしているのかを尋ねた00年度の調査結果があります。生徒の約4割が「練習や活動」、約3割が「おしゃべり」と回答していました。部活動には、技術を上達させること以外にも、同じ興味を持つ仲間

が集まる「居場所」としての意義が大きいのでしよう。

長島 確かに、部活動のあと、仲間と部室で話すなど、授業では味わえない楽しみがあると思います。ただ、多くの教師はそれだけで終わってほしくないと考えています。「生徒が成長していく姿を見たい」「正しい生活習慣を身につけてほしい」という思いから、教師は部活動を指導しています。

西島 それらは、先生方が部活動を肯定的に捉えている点ですね。

長島 授業と部活動では、生徒の見え方が違い

ます。生徒を見ていて一番輝いていると感じるのは、教師に褒められたときです。生徒はいろいろな先生に「認められたい」と思っているのではないのでしょうか。授業中は目立たない生徒が、部活動で頑張ったり力を発揮したりすることで教師に認めってもらえるのです。技術を磨くという目的ならスポーツクラブや習い事がありますが、教師の目は届かず、活躍しても学校の中ではさほど目立ちません。しかし、部活動なら、教師が見えていて「うまいな」「頑張っているな」と声をかけたり、大会での入賞やレギュラー獲得の際には「すごいな」と褒めたりと、教師と生徒がコミュニケーションを図るきっかけが増えます。これが部活動を指導する最大のメリットだと思います。

西島 生徒が教科学習以外の場面で力を発揮している姿を見られることが、教師にとって部活動指導の重要なポイントなのですね。

部活動に対する教師の姿勢を 生徒は鋭く見ている

西島 長島先生は、部活動では生徒にどのような指導をしていますか。

長島 生徒が入部した段階から、どんなチームを目指していくのかを具体的に話して、日々、伝え続けるようにしています。何か問題が起きるから、「人とうまくやっっていくのが部活動では大事だぞ」「我慢することがこれからの人生



にしじま・ひろし◎東京大大学院教育学研究科博士課程修了後、現職（4月より首都大学東京都市教養学部准教授。編著書に「部活動―その現状とこれからのあり方」（学事出版）。

に役立つぞ」と言っても説得力はありません。私の場合、「立派な大人になる」、つまり、当たり前の行動ができるチームづくりを目指しています。中学生にとって当たり前の行動とは何かというと、生活のほんの一部である部活動よりも、それ以外の時間を大切にすることです。例えば「授業中に居眠りをするくらいなら練習に出なくてよい」と生徒に伝えています。

西島 部活動を通して生徒指導をしているといえますね。

長島 そうですね。以前、ある学年が荒れてきたときに「あの学年で部活の顧問をしている先生は何人いるのか」と話題になったことがありました。「生徒は、自分たちのために先生が何

をしてくれているのかを、部活指導をする顧問教師の様子を通じてしっかり見ている」と指摘する先生からの意見でした。

西島 私たちの調査では、「部員の学業成績を知っているか」「友だち関係を知っているか」という教師への質問に対して、部活動にたくさん顔を出している顧問ほど、生徒のことを把握しているという結果が出ました。部活指導に熱心な教師は、ほかの教師から「部活ばかりして」と思われがちですが、ほかの校務にもきちんと取り組んでいるという傾向も見られました。顧問を引き受ける教師のほとんどは、本当に生徒のことを思っているのだと、調査結果を見て実感しました。

中学校での部活動の基本的な考え方



財団法人日本中学校体育連盟
専務理事
三辻陽夫
Mitsui Akio

学習指導要領での部活動の位置づけの変化

これまで半世紀以上に渡って部活動が行われてきましたが、学習指導要領の中での位置づけは、そのときどきによって変わってきました（P.14図1）。例えば、1969年の改訂時には、特別活動の一つとして「クラブ活動」が必修の活動として設定され、放課後の「部活動」は希望する生徒のみ参加するというものでした。その後、89年の改訂では、部活動への参加によってクラブ活動を履修したものとみなす、いわゆる「部活代替制度」が認められました。

そして、98年の改訂（現行の学習指導要領）では、特別活動としてのクラブ活動が廃止され、部活動は学校教育活動の一環として実施されるよう配慮されました。

行政と日本中学校体育連盟（以下、中体連）の関係も時代と共に変化しています。例えば、以前は部活動に関するさまざまな通達は、文部科学省から各教育委員会に送られていました。現在は中体連が関連する部活動について関係機関の指導を受けながら自主的に通知する形式となっています。



ながしま・あきら ◎教師歴14年。保健体育科担当。生活指導担当。初任校では、特別支援学級の部活指導のほか、バスケットボール部やタッチラグビー部の創部に尽力する。前任校では高校・大学時代のラグビー経験を生かしてラグビー部を創部。赴任3校目の同校でもラグビー部の顧問を務める。

長島 ある運動部を指導している同僚に「なぜ顧問をしているのか」と聞いてみたのですが、「好きだからだよ。教育課程の一部かそうでないかなんて関係ないよ」という答えが返ってきました。

西島 ただ、「私は教科を教えたくて教師になった。顧問をやるためではない」という先生もいませんか。

長島 「部活動は意味がない、する必要はない」と思っている教師はごく一部です。私の実感としては、顧問の先生方のうち、専門性を生かして部活動に熱心に取り組む先生が5割、技術はないけれど生徒のために前向きに取り組もうという先生が4割、消極的な先生が1割でしょう。ただ、部活動を熱心にすれば学校がうまくいくというわけではありません。バリバリ指導する熱血先生から和やかな優しい先生まで、い

ろいろなタイプの教師がいて学校はうまく動いていきます。活発な部活動についていけない生徒もいますから、週1、2回だけ活動する部も必要です。そのバランスが大切だと思います。

西島 生徒の立場からすると、活動が毎日ではない部もあった方がよいことですね。毎日指導するのが大変だったり、指導に前向きでなかつたりする先生でも、そうした部の顧問を引き受けて週1回でも一生懸命に指導すればよい、という考え方もできそうですね。

上達を求める生徒のニーズに学校は応えられるのか？

西島 部活動が大切だと思っていなくても、なかなか自分のスキルを生かせない教師もいます。特に経験のないスポーツの顧問をするのは、大変

中体連では、部活動は生徒の「健全育成」「体力向上」「生きる力の向上」、そして教師と生徒、または生徒同士の人間関係を育てる上で不可欠な活動と考えています。今回の学習指導要領の改訂に際しても、「教育活動の『一環』にとどまらず、『教育活動の『一つ』』として明確に位置づけてもらえるように働きかけました。今回の学習指導要領の改訂で、部活動の意義が明記されたことはとても重要な意味があると思います。

生徒と一緒に学ぶ姿勢を持つて

地域のスポーツクラブとの連携や顧問を担当する教師の負担など、部活動を取り巻く課題は多数存在します。地域に強いスポーツクラブがあれば、生徒がそちらに流れてしまっても構いませんが、部活動と地域のスポーツクラブとは位置づけが異なると考えています。部活動はあくまでも学校の教育活動として行われているものです。その前提を踏まえた上で、今後はスポーツクラブのスタッフと協力体制をつくるなど、上手に外部とも連携していく必要があると思います。

教師の負担という点では、「技術指導力がないから顧問はできない」と考える先生が多いと思います。しかし、「指導しなければ」と思いすぎず、生徒と共に「学ぶ」という姿勢がまず大切なのではないのでしょうか。なぜなら、部活動の教育上の目的は「生きる力」の向上にあるからです。教科指導とは違った形で生徒と接することができるよい機会にもなりますし、試合などで一緒に戦い、感動した経験は、生徒と教師どちらにとっても貴重な体験となるはずです。先生方には是非、生徒の中に「生涯に渡ってスポーツを楽しむ姿勢の基礎」を育ててほしいと思います。

でしょう。

長島 そのスポーツにのめり込む教師もいれば、挫折してしまう教師もいます。職員室では「部を強くすることも大切だけれども、生き方を教えらるる場が部活動ではないか」とよく話しています。

西島 技術を教えられなくても、生徒に伝えられることがあるわけですね。

長島 新しい部を創設したり、存続が危うかったりした場合に、「先生にお願いしたら、顧問になってもらえた、一肌脱いでもらえた」という信頼を生徒から得られることは大きいですね。自分では技術指導ができなくても、外部の指導員を頼むという方法もありますから。ただ、外部指導員の場合、技術の上達だけを重視してしまう可能性もあります。外部指導員と顧問の先生、あるいは外部指導員と生徒の関係がうまくいかないケースもあります。

西島 外部指導員を活用すること自体は大切だと思いますが、それによって顧問が楽になるという安易な発想だけで依頼すると、生徒にとっても教師にとっても望ましい結果は得られないでしょう。しかし、部活動をする以上、生徒はやはりうまくなりたいと思っっているはずですよ。

長島 生徒の部活動への要求が10年前より高くなってきていると感じています。昔ながらの部活動



では納得しない生徒も多く、部活動にも外部クラブと同様に上達できるように指導を求めています。外部クラブに行かなくても身近な学校で技術が上達できる仕組みがあれば、それが一番です。しかし、現実には学校だけで応えるのは難しく、大きな課題だと思います。

前向きな教師の 気持ちに伝える仕組みを

長島 部活動を一生懸命している同僚に「人・モノ・金のうち、何が一番欲しいか」と聞いてみたことがあります。すると、その先生は「人もモノも金もいらなから、自分の時間が欲しい」と答えました。部活動の意義を感じていたとしても、多忙な毎日を送る教師にとって、時間の確保は切実な課題だと思います。

西島 教師の部活動に対する姿勢によって、必要とするものはさまざまということでしょう。スキルがあつて熱心に指導している先生は、人的配置などによって多忙感がなくなれば、今のままでもよいのかもしれませんが、前向きな気持ちがあるのにスキルがなく、もどかしさを感じている先生は、研修などを通して気持ちを行動に移せる状況に改善していくことが必要だと思います。部活動への関心が薄い一部の先生方には、部活動が教科学力にもよい影響があることを改めて強調するなどし、学校全体として部活動を支えていくことが大切なのではないでしょうか。また、どこからどのように部活動を変えていくのか、行政も、学校も、真剣に考え直す必要があります。

対談を終えて

部活指導の課題は

教師の負担、指導技術、少子化対応

東京大大学院教育学研究科助教

西島 央

新学習指導要領で 部活動の意義を明記

この10年、「総合型地域スポーツクラブ」を各中学校区に整備するという国の方針の下、部活動の役割は学校外に移行する流れにありました。その背景には、社会体育の充実や完全学校週五日制の導入、オリンピックでのメダル数の減少などが挙げられます。高校を卒業した途端、スポーツや文化活動をやめてしまう若者の多さへの危惧もありました。

ところが、この動きはなかなか地域に根付かず、部活動はそのまま中学校で行われているのが現状です。多くの教師が部活動の必要性を感じ、手放さなかったことが要因の一つだと考えられます。私たちの調査では、主に土日だけ指導をする教師でも、部活動の必要性を感じている割合が高いという結果が出ました。しかし、部活動は教育課程外の教育活動であるため、熱心な教師は自由に指導できる半面、断る教師が

いるのも事実です。そこで指導のバラツキを小さくするように、教育課程との関連を図る方針へ転換してきたのです。新学習指導要領でも、依然として教育課程外ではあるものの、学校教育の一環として部活動の意義を示し、教育課程と関連付けるよう留意すること、としています。

地域に合った部活動を つくるのが大切

長島先生とのお話を整理すると、部活動を教育課程に関連付ける際の課題は三つあります。一つは時間の問題です。部活動を教育課程と関連付けて、学校教育の一環としてどの中学校でも実施していくとなると、人の配置や授業負担の軽減などの対策が必要になります。

二つめはスキルの問題です。部活動の指導は授業とは別の指導力が求められます。一定の指導技術や管理・運営ノウハウを教師が学ぶ機会が必要であり、これらの体制をどう整えるかを学校や地域ごとに考えていくことも大切です。

三つめは少子化への対応です。生徒も教師も少なくなったことで、サッカーや野球など団体競技の人数がそろわない、部の種類が限られてしまう、などが考えられます。廃部にせざるをえないケースもあるでしょう。その場合、複数の学校の生徒が集まって合同で活動する方法もあります。ただ、教育課程との関連を深めようとする、内申書を書くために部活動に関する情報を学校間でどのように共有するのか、進路指導とのかかわりが大きな課題になるでしょう。

今後の部活指導をどうするかは、新しい学習指導要領の総則に示された方針（P.14 図1）に沿って、それぞれ自治体や学校が考えることになります。地域や学校、教師によって事情は異なりますから、方策はいろいろと考えられそうです。例えば、隣り合う中学校がとも離れている地域では、地域の社会体育と連携して、生徒と大人と一緒に活動しているケースがあります。夕方4時から6時までは中学生だけで活動し、6時以降は大人も参加するクラブになるといった形態です。また、各校が部活動と教育課程をどこまで密接に関連付けるかによって、部活動だけでなく、生徒指導や進路指導の在り方も変わっていくでしょう。

部活動と教育課程の関連や意義が学習指導要領に明記されるのは、今回の改訂が初めてとなります。まさに今が過渡期で、各校、各教師が部活動とその指導の新しい形を積極的に発信し、共有していくことが求められます。

特集 1

つながり、深める「部活」指導

学校事例

1

東京都 世田谷区立千歳中学校

「顧問」と「管理顧問」の役割を明確化 保護者の協力で部活が活発に

教師自身が経験のない部の顧問を任されても、活動が沈滞化しないよう、世田谷区では外部指導員を制度化している。千歳中学校では同制度を活用しつつ、保護者の協力も得て、充実した部活動を行っている。

顧問を支える 区の外部指導員制度

「バスケットボール部の顧問が異動するので、担当してもらえませんか」

2005年春、新任で千歳中学校の赴任が決まった山口裕之先生は、宮澤典夫校長からそう頼まれた。バスケットはおろかスポーツの競技経験のない山口先生は、当時をこう振り返る。

「教師1年目でしたから、なんでもしてやろうという気持ちでした。生徒への技術指導は外部指導員が行うと聞いていたので、自分は生徒と一緒に覚えていけばよいと思いました」

部の存続を心配していた部員は当初、山口先生の就任を喜んでいた。しかし山口先生は、次第に部員との壁を感じるようになったという。

「練習の場においても、私は何も指導しないため、生徒とうまく交流できませんでした。『何もできないなら、自分が行く意味はない』と思ったこともありました」（山口先生）

それでも、山口先生は放課後、10分でも20分でも練習を見に行くようにした。そんな姿を目にする部員が増えるにつれ、顧問として認められるようになっていったという。バスケット部顧問は08年度で4年目となり、今では新入部員に簡単な技術を指導できるようになった。ただ、基本的に技術指導は外部指導員（世田谷区では

School Data



東京都
世田谷区立
千歳中学校

1948年度に2つの中学校が合併して開校。校区には閑静な住宅街が広がる。人間尊重の精神を基

調として、生涯を通じて学ぶことのできる人間の育成を目指す。校区の幼稚園や小学校、隣接する都立高校との交流が盛ん。05年度から2年間、「世田谷区教育ビジョン推進研究指定校」。

校長 宮澤典夫先生

生徒数 565名

学級数 16学級

所在地 〒157-0071
東京都世田谷区千歳台6-15-1

TEL 03-3300-7361

FAX 03-3300-7370

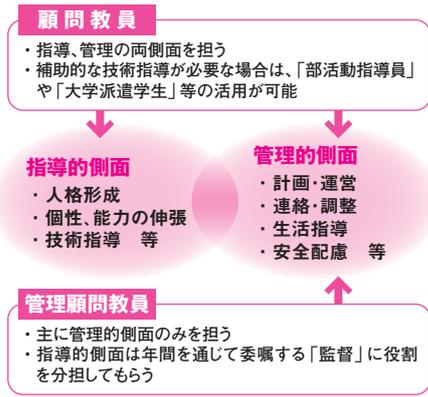
URL <http://www.setagaya.ed.jp/tchise/>

「部活動支援員」に任せている。

「バスケットそのものに詳しくなるよりも、生徒と一緒に活動すること自体に興味があると考えています。土日には区の審判講習会などが開かれています。講習を受けるよりも、生徒の試合や練習に参加しています。これは、技術指導面を外部指導員に任せられるからこそ可能なことだと思っています」（山口先生）

教師の異動に伴い、技術指導ができる顧問の数の変化は、どの学校にとっても大きな課題だ。世田谷区では部活動を学校の教育活動と位置づけ、「校長および教師のだれもが何らかの形で部活動にかかわりを持つ」という方針を掲げ、「顧問と管理顧問の役割を明確にした（図）。そ

図 部活動に求められる役割と教師の従事形態



世田谷区では、監督、部活動指導員、大学から派遣される学生などの技術指導員(補助者)の総称を「部活動支援員」としている
出典/世田谷区教育委員会「部活動活性化のための手引き(平成19年度版)」

部費の管理や試合に保護者が協力

の上で、外部指導員を「部活動支援員」として制度化している。同校はこの制度を利用して、バスケットボール・野球・サッカー部で計6名の外部指導員を依頼し、教師の負担を軽減している。

同校には14の部がある。部活動加入率は9割を超え、生徒の8割は運動部に入る。世田谷区では生徒は校区内の指定された中学校への入学が基本だが、指定校変更を希望し、校区外から同校に入学する生徒が、例年、約1クラス分に上る。理由の一つが部活動だ。中でも、区内に数少ないラグビー部への入部を理由に、校区

外から入学することもある。

練習日は部によって異なるが、ラグビー部、バスケット部などは土日も含めて週5、6日となるため、体力や勉強との両立を理由に練習から遠ざかってしまう生徒もいる。顧問はそうした生徒を根気強く支援する。女子バレー部顧問の五十嵐章先生は、「たまたま同じ年に生まれ、同じ地域に住んでいる仲間が協力して活動し、試合に勝ったり負けたりしながら成長していく場、それが部活動だと思います。勝利を目標にしなければ運動部は成り立ちませんが、ただ勝てばよいわけではありません。部活動を通して生徒の心も育てていきたい。それが難しくもあり、一番大事なことだと思います」と話す。

部活動を支える保護者の存在は大きい。同校ではすべての部に保護者会があり、各部の保護者代表と副代表、教師代表3名が参加する「部活動委員会」を設置している。年間3000〜5000円の部費のうち2000円を本部費として、同委員会の会計担当の保護者が管理し、文化部なら校外発表などの参加費に、運動部ならブロック大会の参加費に充てる。本部費以外の部費管理については、部によって異なるが、保護者会が管理している部も多い。

保護者には試合見学を呼びかける。ラグビー部顧問の長島章先生は「生徒が怪我をしたら、自分の子どもだけでなく、ほかの子どもの面倒も見てください」とも保護者に伝える。実際、試合を見に来る保護者は多く、生徒が怪我をし

たときに自主的にサポートしてくれることもあるという。

「世田谷区では教師全員が顧問を受け持つ方針ですが、難しい面もあります。保護者に教師の現状を理解してもらうために、部活動保護者会では『部活動は教師のボランティアで行っています』と伝えていきます。また、外部指導員には800〜1000円程度の時間給が区から支給されていることを考え合わせても、教師にも金銭面・時間面の更なる支援が必要です」(宮澤校長)

同校の取り組みは、顧問教師を支えるために外部指導員と保護者を巻き込むことの可能性と、顧問教師の待遇の改善の必要性を示唆している。



世田谷区立千歳中学校校長
宮澤典夫 Miyazawa Norio

世田谷区立千歳中学校
美術科担当 女子バレーボール部顧問
五十嵐章 Igarashi Akira

世田谷区立千歳中学校
保健体育科担当、ラグビー部顧問
長島章 Nagashima Akira

世田谷区立千歳中学校
数学科担当、バスケットボール部顧問
山口裕之 Yanaguchi Hiroyuki

特集 1

つながり、深める「部活」指導

学校事例

2

東京都 新宿区立四谷中学校

すべての部に顧問を複数配置 教師の負担が軽減

小規模校の部活動の存続は、顧問を務める教師の異動に左右されがちだ。そこで、四谷中学校ではすべての部に複数の顧問を置き、地域の協力も得ながら、生徒の部活動の場を守っている。

「教師が異動しても 廃部にならない」が生徒の意欲に

四谷中学校の部活動に対する方針は、同校の経営方針の柱の一つであり、とても明確だ。「新しい部はつくらず、既存の部をきちんと継続させる」こと。理由の一つに「生徒のモチベーションが高まること」を谷合明雄校長は挙げる。

「顧問が異動した際に引き継ぐ教師がいなければ、廃部になるのが一般的です。しかし、今まであった部が突然なくなったら、生徒はどう思うでしょう。新宿区では学校選択制を導入していますが、生徒が中学校を選択する際の最大

の理由は部活動という調査結果が出ています。

部活動をしたくて入学してくる生徒の活動の場を保障することが、生徒の学校生活や学習に対する意欲を高めるきっかけになるのです」

部の継続を保障すれば、廃部の影響で入学希望者が減るような事態を防ぐことができ、生徒数と教員数を一定に保てる。学校運営が安定し、教育の質の安定化につながる。

谷合校長が部活動の現状維持策を取り入れたのは、新宿区が学校選択制にした2004年以前の99年、同区内の前任校のときだ。大規模校から小規模校に異動し、創廃部が繰り返される状況を目の当たりにしたのがきっかけだった。都全体として教師の異動サイクルが早まる傾向

School Data



東京都
新宿区立
四谷中学校

2つの中学校を統廃合して2001年度に開校。校地は東京の都心部に位置する。3年間の教育計画を作成し、評価規準を明確化。45分授業のもと、「オールB以上・オール3以上」という目標を掲げる。06、07年度に文部科学省「コミュニティ・スクール推進事業」の委嘱校。

校長	谷合明雄先生
生徒数	363名
学級数	11学級(うち特別支援学級1)
所在地	〒160-0004 東京都新宿区四谷1-12
TEL	03-3358-3771
FAX	03-3358-3770
URL	http://academic1.plala.or.jp/jyotsuya/

にあり、創廃部も加速するのではないかとという危惧もあった。

谷合校長が四谷中学校に赴任して3年が過ぎた。06年度の新入生は110名だったが、07年度は132名と、1学級増やして対応するほど入学希望者は増加傾向にある。しかも、全校生徒363名のうち約80名が電車通学というほど、同区の全域から入学している。

外部指導員には 「学校教育」であることを強調

部の継続を支えるのは、複数顧問制だ。同校には全部で14の部があり、教師は全員、基本的



写真 吹奏楽部の練習の様子。区の予算を使って、地元の管弦楽団から外部指導員を招いている。このように合同で練習することもあり、年齢を超えた交流が広がっている

に二つ以上の部の顧問を担う。一つの部に2名以上の教師が就くことで、練習の付き添いや対外試合の引率を分担。顧問だけで対応できない場合はほかの教師が引率するなど、教師全員が協力することが、各教師の負担減に結び付く。

「顧問は教師の本務ではなく、強制はできません。ただ、本校の学校運営の柱であることをきちんと説明し、積極的にかかわるように伝えたいです。その結果、ほとんどの教師が理解し、顧問を引き受けてくれます」（谷合校長）

転任してきた教師には、担当したい部・できる部を聞く。希望が合えばその部の顧問を務めてもらい、それ以外は顧問となる部を谷合校長が打診する。例えば、演劇指導で優れた実績のある教師でも、同校には演劇部がないため、卓球部と理科部の顧問を務めてもらっている。自分の得意分野でなくても、学校全体として生徒

の意欲向上につながるのであれば、前向きに顧問の役割を果たすべきと納得しているのだろう。

教師が専門外の部活動を受け持つ場合、技術指導は外部指導員が担う。07年度は、野球部、バレーボール部などで10名の外部指導員を依頼した。外部指導員には、部活動は技術習得だけでなく生活指導も含めた学校教育の一環であることを依頼当初から強調している。それでもときには顧問と外部指導員の意見が一致しないこともあるが、今までに大きなトラブルはない。

「そもそも外部指導員は、地域の体育指導員や子どもと一緒に活動したいというボランティアの方ばかり。学校の方針をきちんと話せば、理解を得るのは難しくありません」（谷合校長）

外部指導員の募集に際しては、PTAや地域のスポーツチームに声をかけたり、同区の公立小・中学校に配置されているスクールコーディネーター（注1）に依頼したりする。

生涯教育の一環として 地域の団体と合同練習

同校は06年度から2年間、文部科学省の「コミュニティ・スクール推進事業」の指定を受け、同区が推進する「都市型コミュニティの構築」と一体となった研究を続けてきた。08年度から2年間は区の「地域協働学校」の指定を受け、地域の人材活用などを通して地域ぐるみで子どもを育てていく取り組みだ。部活動もこの一環

として、社会体育と連携しながら進めていく。

「部活動を生涯学習の一環として位置づけた」と考えています。普段は地域の人々と交流しながら練習し、大会やコンクールなど成果を披露する場合は、学校の代表として参加する。技術を更に磨きたい生徒は、外部クラブにも所属すればよいのです。実際、本校の野球部やサッカー部の生徒は、地域の野球クラブや少年サッカークラブにも入っています。吹奏楽部は地域の管弦楽団と一緒に練習しています（写真）。

世代の異なる人々とながり、それが町づくりやコミュニティづくりへと広がっていくと考えています」（谷合校長）

07年度に校庭に照明を設置し、夜間でも地域の人々が練習しやすいようにした。地域の人々が学校に集まることで、新たな外部指導者を見つけられればという期待も込められている。

同校の校区にある四谷小学校には、07年度に幼稚園と保育園が一体化した「四谷子ども園」が開園した。ゼロ歳児から中学生までの15年一貫教育への施策が始まっている。その先にあるのは、部活動に限らず、幼児から高齢者まで共に学び合う場をつくること。中学生が活動する場を保障するという同校の取り組みは、そうした大きな流れの中で動いている。



新宿区立四谷中学校校長
谷合明雄 Tanai Akio
全日本中学校長会生徒指導部長

特集 1

つながり、深める「部活」指導

注1 地域と学校をつなぐパイプ役として、「総合的な学習の時間」や部活動に必要な人材を探すなどの支援を行う。准公務員の立場で職員室に席もあり、地域との連携に欠かせない存在

インタビュー

今後の「部活」指導

グローバル社会に向けて
部活動の意義を
今こそ問い直す

中央大文学部人文社会科学科教育学専攻教授

古賀正義

部活動は教科学習とは異なる良さがある。それは、生徒にとって努力の成果が比較的に見えやすく、喜びを感じやすいこと——と話す中央大の古賀正義教授。

よりよい部活動指導のポイントと、中学校教育における今後の部活動の在り方をうかがった。

部活動は
広い意味でのキャリア教育

高校や大学の推薦入試の面接では、多くの生徒が勉強と共に部活動の話をします。学校の中で部活動がいかに大きな柱かがうかがえます。

教科学習とは異なる部活動の良さは、「スモールステップ」が見えやすい点です。教科学習は、定期テストや入試といった長期的な目標に向かつて取り組みます。一方、部活動は、例え

ば陸上部の場合、タイムが縮まった、高く飛べたなど、努力の結果が比較的すぐわかります。中学生は自分の喜びや成果を素直に周囲に言うのをためらう世代です。いつも生徒を見守っている教師が、その小さな「できる」をきちんと見つけ、言葉にして褒めることで、生徒は達成感を味わえます。教師にとっても、教室外で生徒との交流を深める絶好の機会です。また、大会などの結果自体は便宜的なものです。それを喜びやくやしき、友人関係の深まりといった有機的なものに変えられるのが部活動です。

社会に出ると、利害が伴い、成果が求められることがたくさんあります。部活動は企業ほど成果主義ではありませんが、成功したり失敗したりという結果を生徒なりに経験できます。これは、広い意味のキャリア教育になります。例えば、部活動を通して、自分がいくら頑張ってもできないことや、追いつけない人・目標があることを知る、いわば「小さな挫折」を中学時代に体験しておくことは大切です。将来、もっと深刻な事態に直面しても立ち直ることができ、現実的な「少し上のレベル」に挑戦する意義や意欲を身につけることができるからです。

中学生になると、どちらかというと「先に答えありき」で考えるようになります。しかし、部活動には先に知識や答えがありません。試行錯誤するうちに上達し、集団での自分の存在が見えてきます。つまり帰納的な営みなのです。教師はこうした部活動ならではのメリットを理解・納得し、生徒に伝えてほしいと思います。

部活指導を評価する
仕組みが求められる

さまざまな課題を抱えながらも、教師はなぜ顧問を引き受けるのか。引き受ける以上、教師にとってよりよい指導を行うためのポイントは



こが・まさよし◎筑波大大学院教育学
研究科修了後、宮城教育大助教等
を経て2003年より現職。専門は教育
社会学。主な研究分野は、学校組織文
化、学級運営など。編著書に「(子ど
も問題)からみた学校世界」「学校の
エスノグラフィ―」《教師》という仕
事「ワーク」(共編著)などがある。

何か。ここでは次の3点を挙げたいと思います。

第1に、新学習指導要領では「学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」とされていますが、それでもあえていえば、教師全員に部活動の指導を強制する必要はないということ。教師がいよいよ担当していただければ、生徒にもわかってしまいます。大切なのは、教師が自分の持ち味や専門性に合う仕事を一つひとつ確認しながら選んでいくことです。部活動は、教師の教育的な能力を高め、ていく大事な機会であることをまず自覚し、自己選択として取り組む必要があるでしょう。

第2に、自分が顧問をしている部活動の成果について、ほかの教師と話をしてみてください。教師の仕事には、成果と直結しなくても地道に継続しなければならないことがたくさんあります。教師にも、生徒と同じように成果のスムーズ

ルステップが必要なのです。ほかの教師との対比の中で、自分が取り組んでいる活動の意味が見いだせることもあるでしょう。更に、人が見落ししがちな生徒の側面に目を向けて、皆でその生徒の評価を多面的に重ねていくこともできます。そうすれば、教師にとっても、スムーズなステップが見えやすくなると思います。

第3に、評価の問題です。教師の経歴を見る際、日本では「野球部顧問担当」のように短い記述のみで、大会入賞などの実績だけが評価されてしまうこともあります。対照的に、アメリカの職業人の履歴には「何年何月に何をしました」という活動を細かく記入することがあります。日本の教師にも「指導歴」のような評価があつてよいと思います。具体的には、部活動の練習に毎日付き合ひ、合宿にも参加した、ということが履歴になって積み上げられていくような仕

組みです。これがあると、部活指導のやりがいも出てくるのではないのでしょうか。

部活動の位置づけと教師の役割を明確にする

これからの社会では、グローバル化が更に進み、学力保障と同じように趣味や体力の保障も重要になります。「ハイパー・メリトクラシー(注1)の時代」が到来すると言われているからです。そのような時代に求められるのは、いろいろな資質を持ち、どんな困難にも前向きにポジティブ指向で立ち向かうタフな人材です。イギリスの名門大学でラグビーやボートが盛んなのは、知性だけでなく身体性や集団性を養うためです。日本の政財界のリーダーの多くも、文化活動やスポーツなどをたしなみ、懐の深いタフな人たちです。

これまで部活動は、教師の善意に支えられてきました。しかし、部活動の位置づけを曖昧なままにしておけば、学校で取り組む必要はないという結論になりかねません。部活動を教育活動の中にどう位置づけ、教師が何をどこまで指導するのかを明確にすべきです。中には、部活動の再構築に向けて、小中連携など新たな手法を取り入れている学校もあります。部活動には学校にしかできない貴重な価値があることを再確認し、位置づけを明確化することで、ますます有意義に活発なものになると期待しています。

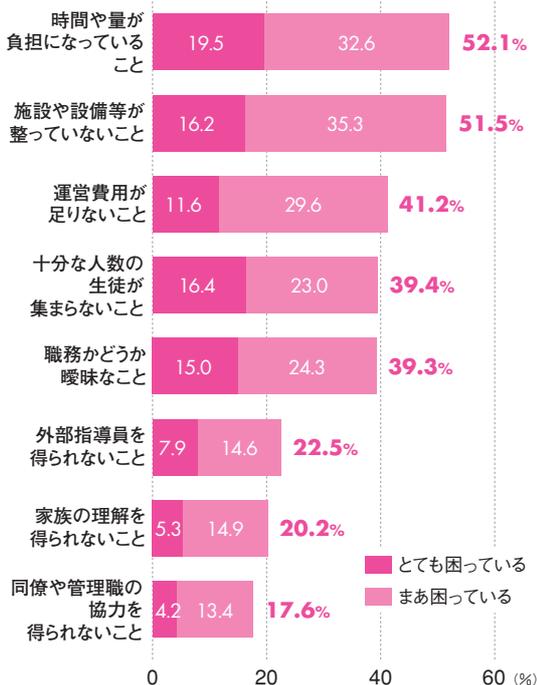
特集 1

つながり、深める「部活」指導

注1 教育社会学者の本田由紀先生による造語で、ポスト近代化社会において、「生きる力」、個性、創造性、意欲など、個々人に応じて多様でかつ情動的な部分を多く含む能力が重視される社会のこと

図2 部活動指導上の課題

Q.部活動を担当するうえで、以下のことがらについてどれくらい困っていますか



顧問が考える部活動指導上の課題としては、「時間や量が負担になっていること」(52.1%)、「施設や設備等が整っていないこと」(51.5%)が最も多く、いずれも5割を超えている

図1 学習指導要領における中学校部活動の位置付け

学習指導要領の改訂年	教育課程内	教育課程外
1947年 (昭和22)	「自由研究」 (教育外活動全般を指していた)	
1951年 (昭和26)	「特別教育活動」 (「自由研究」を制度として整備)	
1969年 (昭和44)	特別活動 「クラブ活動」 (必修)	部活動 (任意)
1989年 (平成元)	【部活代替制度】 (部活動への参加をもって クラブ活動の履修に替える制度)	
1998年 (平成10)	廃止	部活動(任意)

新学習指導要領における部活動の扱い

08年2月に公表された学習指導要領の改訂案では、「総則／指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の中に、部活動の意義と留意点が明記された。「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること」と書かれている

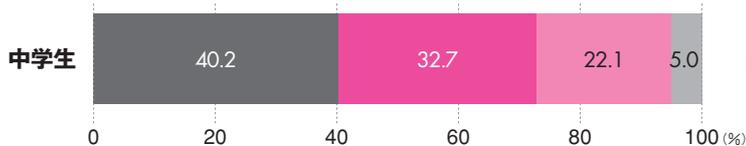
図3 生徒の部活動の楽しみ (顧問教師回答／生徒回答)

Q.(顧問教師に対して)生徒たちが何を部活動の楽しみにしていますか



生徒が部活動で楽しみなことは「練習や活動」が最も多い。特徴的なのは、顧問が考えるよりも多くの生徒が、「おしゃべり」を部活動の楽しみとしている点だ(顧問5.6%、中学生32.7%)

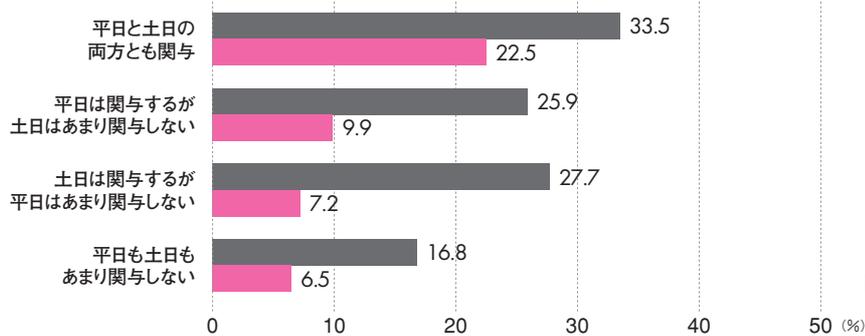
Q.(中学生に対して)あなたは何を部活動の楽しみにしていますか



■ 練習や活動 ■ おしゃべり ■ 試合 ■ その他

図4 生徒の学業成績や友人関係を「よく知っている」顧問教師の割合 (部活動への関与の度合い別)

Q.担当している部活動の生徒についてどれくらい知っていますか



生徒の学業成績や友人関係を「よく知っている」割合は、平日も土日も部活動に関与している顧問が最も高い。部活動にかかわることと生徒の多面的な把握とは関連がある

*「よく知っている」と回答した割合
■ 学業成績 ■ 友人関係

図2~4出典/中等教育研究会(西島央代表)「部活動の指導・運営に関するアンケート報告書」(2008)
調査時期:2007年7月 調査対象:東京都・静岡県・新潟県の国公私立中学校の陸上競技部・水泳部・バスケットボール部・軟式野球部・女子バレーボール部・柔道部、合計1,853部の顧問教師。705名より回答を得た
(図3の中学生向け調査は、2001年3月、東京都・静岡県・新潟県・岐阜県・鳥根県・高知県・鹿児島県の中学校35校、2年生4,206名を対象に実施)

日本陸上競技連盟理事 高野 進

「これしかない」と信じるのが 一流への道につながる イメージを走りに結びつける創造力

陸上競技の400メートル走で3回オリンピックに出場するなど、日本を代表するスプリンターだった高野進さん。

現在、母校の東海大学で後進を指導する高野さんは
「何かを究めようとするなら、選択肢は一つしかないと思う。
そこに最高の情熱とアイデアを向けることが重要です」と熱く語る。

一流のスプリンターに 求められる「観察する目」

東海大学湘南キャンパスの陸上部グラウンド。メニューに沿って練習に取り組み選手を目で追いながら、ときおり、高野さんが「彼はどういうイメージで走っているのかな？」などとつぶやく。世界を舞台に活躍するOBで教え子の末續慎吾選手の姿も見える。

高野さんの肩書きは、体育学部競技スポーツ学科の准教授である。大学でスポーツ科学論などを教えるかたわら、毎日午後、陸上部のコーチとしてグラウンドに立つ。指導するのは10人ほどの女子学生を含む約50人の短距離選手だ。中には学生でトップクラスの有望選手もいる。

「大事なのは走りを創造することです」と高野さんはいう。そのために選手に求めるのが「観察する目」である。



高野 進

Profile

たかの・すすむ 財団法人日本陸上競技連盟理事・強化委員長。東海大学体育学部准教授。日本スプリント学会会長。1961年、静岡県生まれ。84年のロサンゼルス・オリンピック、88年のソウル・オリンピックの400メートルで共にベスト16。92年のバルセロナ・オリンピック400メートルでは、日本の短距離選手として60年ぶりに決勝に進出、8位入賞を果たす。400メートル44秒78の日本記録は今も破られていない（2008年2月末現在）。

スプリント競技

◎陸上で短距離競走を意味し、100メートル、200メートル、400メートルの3種目にハードル（100メートル、110メートル、400メートル）とリレー（4×100メートル、4×400メートル）を含めた競技。一般的には、上体、下肢共に優れた筋力を持ち、先天的に優れた反射神経が要求される。最近バイオメカニクスによってスプリンターに必要な「筋」や「動き」が解明され、日本人選手もトレーニングによっては、世界のトップランナーと十分に戦えるようになってきた。

「ウォーミングアップやレースで周囲にいる選手の動きを見ながらヒントをもらおう。また、指導者の態度や言葉の端々から、何を要求しているのかを察知する。それ自分なりに取り込んで一つの形にしていけます」

高野さんは「スプリンターはアーティストです」という。100メートルや200メートル、400メートルといった距離をスタートからゴール地点までいかに速く着くか。選手は、そのために走るときの腕の振り方など何通りものイメージを持っている。このイメージは「降りてくる」というのだ。そのイメージを具現化し、自身の最高のパフォーマンスを見せるため、試行錯誤を繰り返す。

バイオメカニクスなど科学的な視点で選手を指導することもある。ただ、科学的な裏付けが大事とはいえ、スポーツの世界では科学は走りの一つの要素でしかない。最終的に問われるのは、選手が「観察」して得たイメージを、創意工夫と想像力で自分の走りに結びつけていく

「これしかない」と信じることが
一流への道につながる
イメージを走り結びつける創造力

能力だ。それはスプリンターのセンスでもあるが、そうしたランナーの内面の葛藤を「アーティスト」と高野さんは自身の言葉で表現する。

一見、リラクセスした雰囲気、風景だが、選手にとっては「観察」し、指導者のメッセージを敏感に受け止めて（新しいもの）を生み出す場なのだ。

同じグラウンドに立つ上で 不可欠な「共通感覚」

高野さんは子どもから駆けっこには自信があった。中学時代は陸上部に所属。本格的に400メートルを始めたのは高校に入ってからだ。最初は1600メートルリレー（4×400メートル）の選手で、以来およそ30年間、理想の走りを追究してきた。この経験から、個人競技であるスプリント競技において高野さんが大事にするのは、同じグラウンドに立つ者としての「共通感覚」である。

「50人の短距離チームは、競技会に出場する選手だけで動いているのではない。大会で勝つという目標があったら、その目標の下にコーチをはじめ、控えの選手やマネージャーなど全員が役割を担って参加している。代表選手は、そういう共同作業の延長にいます。この共通感覚がないと強くなりません」

もちろん選手には記録という目標がある。だが、記録もチーム内に「共通感覚」がないと伸ばすのは難しい。個々の選手に合わせて技術的な指導はするが、モチベーションは1人で維持できないし、指導者をはじめ仲間とのコミュニケーションが大事になる。記録を目指して走

るのは本人でも、それは共同作業の上に成り立っているのである。

「勝とうが負けようが自分の世界だから関係ないというのは、まだ本人がレジャーやレクリエーションの段階にとどまっているということです」と高野さんは続ける。仲間との「共通感覚」があると自分自身の目的意識が研ぎ澄まされ、頑張りが利き、記録を狙う気持ちをより強く保てるようになるのだ。

高校時代に記録を持っていても、大学で伸びない選手がいる。自分のやり方を変えないためである。高野さんは「自分が伸びてきた過程を大事にする気持ちは分かる」としつつも、「過去の経験は土台です。しかし、それに縛られると新たな一歩を踏み出せない」と話す。周囲との間に壁ができて、互いに「共通感覚」が持てないからだ。

高野さんが常々モットーとして掲げている言葉に「ポジティブ・ノンレジスタンス」がある。「肯定的無抵抗」という意味だ。高野さんは高校、大学を通して、コーチの指導には全面的に従ってきたという。コーチが要求することを100%消化して、それを自分の走りで具体的な形にしてさらに高いレベルで示すように努力してきた。そうやってコーチと自分の間に「共通感覚」を築いてきたのだ。

走ることでも自分が成長していく 醍醐味を体感する

一流の選手は「完成されたもの」としてそこにいるのではない。時間をかけて積み上げてきたプロセスがある。

「競技会でスタートラインに立つということは、登山

でいえば頂上の一歩手前にいるのと同じです」と高野さん。92年のバルセロナ・オリンピックでの400メートル決勝で、日本人として6年ぶりにファイナリスト（決勝進出者）になった経験を踏まえて、こう続ける。当時、高野さんは31歳。

「あの時はプレッシャーがすごかった。それだけ自分が高いところに立っているからで、少しでも失敗したら転落するかもしれないという恐怖です。一方で期待もありました。ここまで登ってきた自分への期待、あと一歩を踏み出して頂点にたどり着けば、別の世界が見えるに違いないというワクワクした気持ちですね」

どんな競技会でもスタートする前とゴールした後では、自分の「視界」が変わっていることに気がつく。プレッシャーに耐えて走り切ること、「違う世界」を見つけることができるのである。このスリル感を体感するために、練習の厳しいプロセスがあったという。

競技を通して自分が変わるといことは、その人が成長していることを意味する。走りによって、それを実感する。これはランナーであることの醍醐味であり、高野さんが後進に伝えたいのもまさにこのことだ。この喜びは選手本人のものであると同時に、指導者自身のものでもある。2003年夏、世界陸上パリ大会の200メートル決勝で教え子の末續選手が3位でゴールを駆け抜けた時、「自分の目の前の仕事が変わってくると思いました」と高野さんは話す。それは「自分の生き方が変わる」ことへの予感だったかもしれない、というのだ。

「感動」に人が進化する 原点がある

自らの競技生活を、高野さんは「私にはほかに選択肢



高野さんが指導する東海大学陸上部の練習風景



はないという気持ちがあった」と振り返る。

「400メートルは苦しい種目です。ただ、私が持つすべての力を充填して、残らず放出できるのは、これしかないと思っていました。自分のポテンシャルを一番引き出して、自分自身が有能であると思えるものが400メートルだったので」

一流の選手は「自分がやることはこれしかない」と信じている。だから悩まない。学生の中にはオリンピックを目指したいと思っている選手もいれば、将来は指導者になりたいと考えている選手もいる。何を目指すにしても、「自分にはこれしかない」という気持ちで、そこに最高の情熱、アイデア、興味——自分の持てるものすべてを注ぐことが大事です」と高野さんは助言する。

最近、高野さんは大学教員、陸上コーチ以外にも幅広い顔を見せている。2年前、アスリートの自立を支援するアスレティクス・ジャパン株式会社（旧社名・ラスト株式会社）を設立、厚木市にコミュニケーションレストラン「Lap Time（ラップタイム）」をオープンさせた。この店では教え子の選手も働いている。「食のサービスは相手の気持ちを考えることが基本。自分の走りで他人を感激させるのは一流選手の要件です。接客を通していかにお客様に感動してもらうかを学びながら成長してほしい」と語る。

人も動物も「速く走る」のは本能だ。ただ、人間の場合、そこには感動を求める。「本能的なものと同様でないものの両方を持つて走るのは人間だけです。実に興味深い」と高野さんはいふ。「そこに人が進化する原点があるような気がする」というのが彼の考えだ。これも走りを通して後進に伝えたい大切なことの一つなのだ。

● 今号のキーワード〈授業時数の増加〉〈教科別の指導内容〉

特集

2

新学習指導要領、

ここが変わる

※今号は、2月に文部科学省が公表した

「学習指導要領(案)」を基に作成しています。

「生きる力」を育む 手立ての確立を目指す

新しい学習指導要領は、移行措置が小・中学校で2009年度から始まり、全面实施は小学校では11年度、中学校では12年度となる。

教育基本法等の法改正、学力低下を懸念する世論、国内外の学力調査の結果などを踏まえた上で、中央教育審議会教育課程部会で審議が行われてきた。改訂の基本的な考え方は、次の7点に集約される。

① 改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂

② 「生きる力」という理念の共有

③ 基礎的・基本的な知識・技能の習得

④ 思考力・判断力・表現力等の育成

⑤ 確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保

⑥ 学習意欲の向上や学習習慣の確立

⑦ 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

(出典／中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」〔08年1月17日〕)

学校教育において、「生きる力」を基本理念とすることに変わりはない。これまでと異なる点は、「生きる力」を「知識基盤社会(注1)を担うためにさらに必要な力」と位置づけたこ

とにある。

改正された学校教育法には、

① 基礎的・基本的な知識・技能の習得

② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成

③ 主体的に学習に取り組む態度を養う

の3点に特に意を用いなければならない、と明記されている。

今の子どもには、「生きる力」で重視されている事項に課題があることが、国内外の調査等によって明らかになっている。これらの課題を解決するための施策の一つとして、学習指導要領が改訂されることになる。

注1 新しい知識・情報・技術があらゆる領域で重要性を増す社会のこと

週1コマの時数増と総合的な学習の時間の縮減

「生きる力」の育成という目標は変わらないので、学習指導要領の改訂でのポイントは、「授業時数」と「学習内容」である。

授業時数については、各学年共に週当たり1コマ増となる(図1)。教科ごとに見ると、授業時数が増えるのは国語、社会、数学、理科、保健体育、外国語で、中学3年間で1教科当たり35〜105時間増となる。「総合的な学習の時間」の授業時数は、現行の学習指導要領では「選択教科等」と共に弾力的に設定され、各校が自校の事情に合わせて決められるようになっていたが、新学習指導要領では、標準授業時数が1学年では年間50時間、2・3学年では年間70時間と定められる。1学年では事実上、週当たり1コマ減ることになる。

また、「選択教科等」は枠組みそのものがない限り、標準授業時数の枠外で開設可能となる。現行では「個性を生かす」という方針の下で選択教科が設けられ、学校の特色に応じてカリキュラムが組めるようになっていた。しかし、新学習指導要領では必修重視となり、中学校教育としての共通性が高まったといえる。

朝の10分間に行われるドリル学習等も授業時に算入できるため、各校の工夫の余地がある。また、35で割り切れる時数になる教科が増えるため、時間割が組みやすくなるだろう。

授業時数の増加に伴い、週5日のうち4日が6時間で、5時間で終わるのは1日のみとなる。

学習内容を充実させ「確かな学力」を育成

内容については、「確かな学力」の育成のために、国語・社会・数学・理科・外国語で充実が図られている(P.20図2)。具体的には、削除されたり、上の学年で教えることになっている単元などを戻すことが行われる。

例えば、数学では「図形の移動」が新たに入り、「二次方程式の解の公式」が高校から中3に移行したり、「起ころいする場合の数」が中3から小6に戻ったりしている。同様に理科でも、高校から指導内容が下りてくる分野や、小学校

での指導から中学校での指導に変更になる分野がある。

このような具体的な指導内容の変更に加えて、学習指導要領には「小学校との連携」を意識した言葉が盛り込まれている。各教科における系統性を重視しながら、複数の学年で学ぶという「反復」や、小と中、中と高の接続を重視した指導の工夫がより一層求められているといえるだろう。

08年度は周知・徹底移行措置は09年4月から

新学習指導要領の全面実施までのスケジュールはP.20図3のとおりだ。

09年4月から移行措置がスタートする。各校

教科等	1学年	2学年	3学年	計
国語	140(4) 0	140(4) 35	105(3) 0	385 35
社会	105(3) 0	105(3) 0	140(4) 55	350 55
数学	140(4) 35	105(3) 0	140(4) 35	385 70
理科	105(3) 0	140(4) 35	140(4) 60	385 95
音楽	45(1.3) 0	35(1) 0	35(1) 0	115 0
美術	45(1.3) 0	35(1) 0	35(1) 0	115 0
保健体育	105(3) 15	105(3) 15	105(3) 15	315 45
技術・家庭	70(2) 0	70(2) 0	35(1) 0	175 0
外国語	140(4) 35	140(4) 35	140(4) 35	420 105
道徳	35(1) 0	35(1) 0	35(1) 0	105 0
特別活動	35(1) 0	35(1) 0	35(1) 0	105 0
選択教科等	- 0~30	- -50~-85	- -105~-165	- -155~-280
総合的な学習の時間	50(1.4) -20~-50	70(2) 0~-35	70(2) 0~-60	190 -20~-145
総授業時数	1015(29) 35	1015(29) 35	1015(29) 35	3045 105

*上段は標準授業時数の改訂案。()内は週当たりのコマ数。下段は現行からの増減
出典/文部科学省「幼稚園教育要領、小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領の改訂案等のポイント」(2008年2月15日)

特集 2

新学習指導要領、ここが変わる

図2 新学習指導要領の改訂ポイント

国語	<ul style="list-style-type: none"> 言語力育成の中核を担う教科として、生活や学習に必要な能力を身に付けるため、批評、評論、論説などの言語活動を充実。(言語活動例を「内容の取扱い」から「内容」に格上げし、記述の具体化) 取材、構成などの指導事項を新たに定め、指導のプロセスをより明確化。 我が国の言語文化に親しむことができるよう、古典の指導を重視するとともに、近代以降の代表的な作家の作品を取り上げること。
社会	<ul style="list-style-type: none"> 日本の諸地域及び世界の諸地域の地誌学習を充実 我が国の歴史の大きな流れの理解を重視して、学習指導要領の規定の仕方を見直すとともに、近現代に関する学習を充実。 法や政治、経済などの基本的な概念・基本的な考え方についての指導を充実するとともに、それらの概念を活用して、課題を追究する学習を充実 様々な伝統や文化、宗教に関する学習を充実
数学	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着のため、発達や学年の段階に応じた反復(スパイラル)による指導を充実。(小・中学校で指導内容を一部重複させるなど) 国際的な通用性、内容の系統性の確保や小・中学校の学習の円滑な接続等の観点から、必要な指導内容を充実。(「資料の活用」を新設し、統計に関する指導を充実など) 知識・技能を活用する力を育成し、学ぶことの意義や有用性を実感できるよう、既習の数学を基にして数や図形の性質を見いだす活動などの「数学的活動」を指導内容として学習指導要領に規定。
理科	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的・基本的な知識・技能の定着のため、科学の基本的な見方や概念(「エネルギー」、「粒子」、「生命」、「地球」)を柱に、小・中学校を通じた内容の一貫性を重視。 国際的な通用性、内容の系統性の確保等の観点から、必要な指導内容を充実。(「イオン」、「遺伝の規則性」、「進化」等) 科学的な思考力・表現力等の育成の観点から、観察・実験の結果を分析・解釈する学習活動、科学的な概念を使用して考えたり説明したりするなどの学習活動を充実。 科学を学ぶことの意義や有用性の実感及び科学への関心を高める観点から、日常生活や社会との関連を重視し改善。
音楽	<ul style="list-style-type: none"> 表現活動及び鑑賞活動において共通に必要な能力を示した[共通事項]を新設。 民謡、長唄など我が国の伝統的な歌唱の指導を重視するなど邦楽の指導を充実。 歌唱教材について、「赤とんぼ」、「荒城の月」など我が国で親しまれてきた曲を具体的に規定。
美術	<ul style="list-style-type: none"> 指導内容を育成すべき資質や能力ごとに整理。 表現活動及び鑑賞活動において共通に必要な能力を示した[共通事項]を新設。 我が国の美術文化に関する鑑賞指導を充実。
技術・家庭	<ul style="list-style-type: none"> ものづくり教育の充実や持続可能な社会の構築等に対応する観点から、エネルギー変換や生物育成等に関する学習を必修化。技術を適切に評価・活用するための指導事項を新設。 情報化の進展に対応する観点から、著作権の保護等の情報モラルに関する学習を充実。デジタル作品の設計・製作に関する学習を必修化。 少子高齢化等に対応する観点から、家族と家庭に関する教育を一層充実。 食育の推進の観点から、食事の役割や調理に関する内容を一層充実。
保健体育	<ul style="list-style-type: none"> 発達の段階に応じた指導内容の明確化・体系化。 第1学年及び第2学年を通じて、選択であった「武道」と「ダンス」を含めて、すべての運動領域を必修化。 自然災害に伴う傷害の防止や医薬品についての指導を充実。
外国語	<ul style="list-style-type: none"> 聞く・話す・読む・書くを総合的に行う学習活動を充実。(現行は、聞く・話すに重点) 語数を1200語程度に増加。(現行は、900語程度まで)
道徳	<ul style="list-style-type: none"> 道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであることを明確化。 より効果的な教育を行う観点から、発達の段階に応じて指導の重点を明確化。 各教科等で、それぞれの特質に応じて道徳の内容を適切に指導することを明確化。 道徳教育の推進を主に担当する教師を中心に、全教師が協力して道徳教育を展開することを明確化。 先人の生き方、自然、伝統と文化、スポーツなど、児童生徒が感動を覚える魅力的な教材の活用。 道徳性の育成に資する体験活動を推進(職場体験活動等)。
総合的な学習の時間	<ul style="list-style-type: none"> 総合的な学習の時間においては、教科の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な学習を行うものであることをより明確化。 職業や自己の将来に関する学習活動を例示として追加。 総合的な学習の時間の教育課程における位置付けを明確化し、その指導を充実。(総則から取り出し、新たに章立て)

*2008年2月・文部科学省発表「各教科等の改訂案のポイント」より引用・抜粋

では、08年度中に移行措置へ対応した指導案を作成することになる。その際に重要なのは、新学習指導要領のねらいを、すべての教科の教師がしっかり理解していくことだろう。

文部科学省のウェブサイトでは順次、情報が公開されているほか、08年度中に新学習指導要領について各地で説明会が開かれる。各教育委員会からも多くの情報が発信されるだろう。弊社のウェブサイトでも、新学習指導要領に関する

情報を随時、発信していく予定だ(注2)。

さまざまなところから発信される情報を基に校内・教科内で話し合い、新学習指導要領についての理解を深めていきたい。

並行して、新しい教科書もつくられることになる。12年度からの全面実施に向けて、教材の開発や、指導方法の工夫について教科内で検討することが求められる。

図3 今後の予定



*2008年2月5日時点の文部科学省の発表に編集部が加筆して作成

注2 <http://benesse.jp/berd/>

指導の鍵は「活用」「探究」を 授業にどう落とし込めるか



国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長 **工藤文三**

授業時数を増やし 「確かな学力」の実質化を図る

今回の学習指導要領の改訂は、教育基本法等の改正を受けて行われるものです。法律の中で学力を具体的に規定したことによって、これまで抽象的だった学力観が明確になり、校内や教師間で教育目標を共有しやすくなったといえるでしょう。

改訂の内容を見ると、指導内容の充実が具体的に示され、「確かな学力」を育成しようとする姿勢が明確に打ち出されています。文部科学省は、2002年に発表した「学びのすすめ」において「確かな学力」を打ち出し、「学力向上フロンティア事業」などによって学力向上の施策を行ってきました。新学習指導要領は、この「確かな学力」の実質化を図ったと捉えることができます。

「確かな学力」を育むための工夫は、さまざまな視点から見取れます。授業時数は増えていますが、これは指導内容の増加への対応と共に、

1コマごとの指導構成を 習得・活用・探究の観点で再考

まずきやすい学習内容を繰り返して知識を定着させたり、学習した内容を実際に生かす学習機会をつくったりするための時間などに充てられます。07年度に実施された「全国学力・学習状況調査」の結果を見てもわかる通り、子どもたちの知識はおおむね満足できる状況にあります。それらの知識を実社会・実生活で生かせる「創造的知性」に昇華させてほしいというわけですね。

具体的にどのような指導が求められているのかといえば、「習得」「活用」「探究」がキーワードとして挙げられます。特に知識の習得を「活用」「探究」につなげる活動を、授業にどのような具体化するかが鍵となります。

今、行っている授業にも、先生方は「活用」「探究」の場面を盛り込んでいるはずですが。新しいことをゼロから構築しようとするのではなく、まずは今のご自分の授業を見直してみてください

い。その中に、「活用」「探究」に当たる活動があるはずですが。それらを掘り起こして工夫を施し、発展させることが、指導の改善につながるのです。

改善のポイントは、単元単位ではなく、1コマの授業の中での指導をどう構成するかにあると思います。能力的には「習得→活用→探究」という図式で示すことができても、この三つの内容がはつきり分かれるわけではありません。今日は「習得」の日、明日は「活用」というように分けるのは難しいでしょう。三つの活動のうち、どの指導が合っているのかは、教科や単元の特性によって異なります。例えば、理科のエネルギー保存の法則は基礎・基本となるので、法則をきちんと説明してから実社会での活用場面を話して気づきを促すという方法もありますし、最初に「熱エネルギーが運動エネルギーに変換されている」という生活での活用場面から入り、法則を説明して納得度を高めるという方法もあるでしょう。

教材についても、習得を目的としたものか、活用力をつけるためのものを意識して作成し、授業のどの場面で取り組ませれば効果的かを考えることが重要です。新学習指導要領を受けた教科書には、実生活での活用を問うような問題や、「全国学力・学習状況調査」のB問題（活用）を意識した内容などが、今以上に盛り込まれると予想されます。これらをうまく活用するとよいでしょう。

明日から使える ICT 講座

第1回 教材の提示

従来の教材と併用して 生徒の意欲を刺激する

コンピュータやインターネットなどに慣れない先生にとっては、今でも十分成立している授業に、ICT機器をわざわざ導入する意味を見いだしていくのではないのでしょうか。実際、ただ漫然と授業で使ってみるだけでは十分な効果を発揮できません。ICT機器の特徴を知り、授業の目的に沿った形で導入する必要があります。

ICTを授業で使う際、最も手軽な「教材を提示する場面」を例に考

拡大や繰り返し 自在のICTで 教材を効果的に提示

今回から4回に渡り、すぐに役立つICTの活用方法をメディア教育開発センターの中川一史教授に紹介していただきます。毎回、授業での具体的な利用場面を想定してそれぞれヒントをお伝えします。第1回は「教材を提示する場面」です。

えてみましょう。どのような目的があるときに、プロジェクターなどを使って画像や文字を拡大して生徒に見せると効果的なのでしょうか。それは次の4点に集約されます。

- ① 理解の補完・知識の定着
- ② イメージや意欲の拡充
- ③ 学び方の補完
- ④ 視覚化による思考の深化

どのような教科でも、教材を大きくして生徒に提示したい場面や、手順を繰り返し見せたい場面などがあるはず。まずは、そうした場面から使ってみてはどうでしょう。最初は操作が少々煩わしく感じるかも

しませんが、実際に使ってみれば、導入する価値があることを実感できるはず。ただ、必ずしもすべてをICT化しようとする必要はありません。冊子やプリントなど、今まで使っていたものが効果的だと思えば、そのまま使えばよいのです。ICTと紙をうまく併用しながら、生徒の意欲を刺激して、理解を深められる授業をつくっていきましょう。そういった工夫ができるか否かは、ICTスキルの有無とは関係ありません。「教科のスペシャリスト」としての教師の経験や視点が大切なのです。

活用度UP! | ワンポイントアドバイス

持ち運び・準備に手間をかけない工夫を

先生は授業のために教室を移動しますから、ICT機器もそのたびに移動させて準備をしないと、手間も時間もかかります。そこで、あらかじめプロジェクターとパソコン、ビデオデッキなどの必要な機材をカートなどにひとまとめしておくのです。そうすれば、教室にカート運び、電源につないでスイッチを入れるだけですぐ使えます。授業のたびにケーブルなどを接続する必要がなくなり、もっと気軽にICT機器を使えるはず。このカートを校舎の各階に1台ずつ設置しておけば、重い機材を持って階段を上り下りする必要もなくなるでしょう。



講師 中川一史先生

独立行政法人メディア教育開発センター教授、金沢大教育学部客員教授(併任)。数多くの小・中学校で指導・助言を行っている。

2

イメージや意欲の拡充



これから体験することをあらかじめ映像で見せることによって、イメージが膨らみ、期待感が高まります。それが実際の活動への意欲につながり、体験がより効果的なものとなるのです。

また、イメージを喚起させるような映像を見せることで、生徒の想像力を養うことができます。

■活用例

- 絵を見ながら本を読み、主人公の気持ちをイメージする（国語）
- 修学旅行の事前学習で、現地の映像を見る（総合的な学習の時間）
- 曲に合ったイメージ映像を上映しながら音楽を鑑賞する（音楽）

1

理解の補完・知識の定着



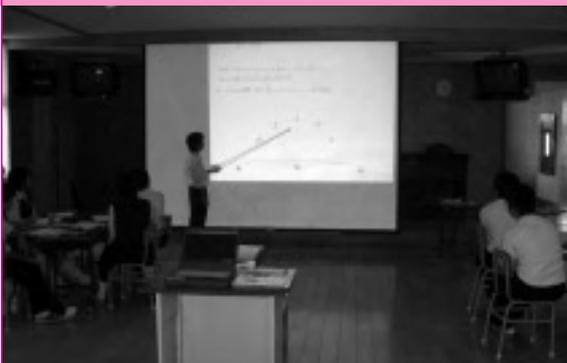
日常生活では体験・観察できないことを、映像を提示し疑似体験させることによって、生徒の理解が深まります。基本は、プロジェクターなどを使った「拡大提示」です。クラス全員の関心を1点に集めることができますし、板書をする間に授業が間延びしてしまうような場面でも、ICT機器を使えばすぐに提示でき、授業をテンポよく進められます。

■活用例

- デジタルカメラで微速度撮影した植物の成長を早送りで上映する（理科）
- 英単語のスペルや意味、発音、口の動きの動画を見せ、練習させる（英語）

4

視覚化による思考の深化



1つしかない資料や生徒の回答を拡大して提示することで、生徒全員が情報を共有でき、一斉に学習課題に対する考えを深めることができます。①の「理解の補完・知識の定着」と似ていますが、ここでの目的は、見ることによってわいてくる疑問、興味をきっかけにして、生徒一人ひとりが考えを深めることです。授業や単元の導入として用いるとよいでしょう。

■活用例

- 図形を変形させることで面積がどのように変化するかをみんなで考える（数学）
- 歴史的な写真を拡大提示したものを生徒全員で見ながら、その時代や政治体制、人物などについて意見を出し合う（社会）

3

学び方の補完



教師の説明に加えて、実験などの手順を映像で確認できるようにしておけば、生徒の理解の手助けとなります。特に実技系の教科では、パソコンやプロジェクターを使って映像を流しっ放しにしておくと、生徒は自分でやり方を確認しながら進められます。それでもなかなかできない生徒がいる場合、先生はその生徒の指導に集中できます。

■活用例

- 追いかけて再生機能（録画をしながら再生もできる）を用い、自分の演技・フォームを確認しながら練習をする（体育）
- 実験や実習の間、手順についての動画を繰り返し上映し続ける（理科、技術・家庭）

特集 3

兵庫県「トライやる・ウィーク」に学ぶ

職場体験の実践ポイント

2008年度で4年目を迎える、文部科学省の「キャリア・スタート・ウィーク」。「5日間以上の職場体験」が本格実施に移される。受け入れ先の確保や生徒への指導など、あらゆる面でより綿密な準備や支援が必要となる。5日間の社会(職場)体験活動を1998年度から継続している兵庫県の事例から実践のヒントを探る。

11年目を迎え、県民に広く浸透
6月か11月の5日間で実施

毎年6月と11月、兵庫県では至るところに「ト

ライやる・ウィーク実施中」と書かれたのぼりがはためく。消防署や幼稚園といった公共施設から、レストランや工場まで、場所は実にさまざま。ここでは真剣な表情の中学生が従業員に指導されながら仕事に取り組み、通りかかった人たちは「どこの中学校?」「頑張ってるね」と、生徒に言葉をかける。この取り組みが県民に広く浸透していることがわかる光景だ。

兵庫県が中学2年生を対象に行う5日間の職

場体験活動「トライやる・ウィーク」は200

8年度で11年目を迎える。きっかけは中学生の

「心の教育」をめぐる危機感からだった。兵庫

県教育委員会義務教育課の片山俊行課長は次の

ように話す。

「95年の阪神・淡路大震災に続き、97年に神戸市須磨区で中学生が小学生を殺傷する事件が起き、教育の在り方を深く考えさせられました。そこで故河合隼雄先生を座長とする『心の教育緊急会議』を設置し、子どもに生きる力を『教

える』のではなく、体験を通して『育む』ことを目指す『トライやる・ウィーク』を始めました」

事業は「心の教育」とキャリア教育を支える

取り組みとして重視され、学校と地域社会との

連携を強めながら続けられてきた。07年度には

370校、4万6821名の中学2年生が1万

5498か所で職場体験を行った。

実施に際しては、県、市町ごとに推進協議会

を、また中学校区ごとに校区推進委員会を組織

して綿密に連絡を図る。例えば市町や中学校区では、商工会・ボランティア団体・PTAの各代表らを構成委員に迎え、官民さまざまな団体を巻き込む。事前に関係者に趣旨を理解してもらい、受け入れ先をスムーズに確保するためだ。

実施期間は6月か11月のいずれかで各校に任されるが、日数は5日間と決められている。義務教育課の松尾達弥中学校教育係長は、「1、

2日目は多くの生徒が挨拶もままならない状態



兵庫県教育委員会
義務教育課課長

片山俊行

Katayama Toshiyuki



兵庫県教育委員会
義務教育課主任指導主事
兼中学校教育係長

松尾達弥

Matsuo Tatsuya

ささやま こんだ
篠山市立今田中学校

◎1947(昭和22)年開校。1小学校1中学校の小規模校。緑豊かな自然環境に恵まれた丹波焼の里で、校区には60軒近くの窯元が稼働する。町民運動会や陶器祭りといった地域行事が盛んで、住人には町ぐるみで子どもを育てようとする意識が高い。

校長 荻野益美先生
生徒数 129名
学級数 7学級(うち特別支援学級2学級)
所在地 〒669-2153
兵庫県篠山市今田町今田新田11
TEL 079-597-3160
URL <http://konda-jh.sasayama.jp/>

たにしゅう
西宮市立大社中学校

◎1947(昭和22)年開校。早くから文化・教育施設の設置を促進し、03年に「環境学習都市宣言」を行った西宮市の中心部に立地。西宮駅周辺の都市部から甲山山麓を含む山林地帯まで校区は起伏に富んでいる。教科学習では「自ら学ぶ観点」での研究を進める。

校長 平岡一夫先生
生徒数 566名
学級数 18学級(うち特別支援学級2学級)
所在地 〒662-0021 兵庫県西宮市神原12-45
TEL 0798-73-5391
URL <http://kusunoki.nishi.or.jp/school/taishaj/>

「推進協議会の委員や卒業生、保護者など関係者の協力を得て確保しました。教師の多くは校外に出る機会が少ないですから、教師にとってもまさに『トライやる』です。丁寧に趣旨を説明すれば多くの事業所は協力してくれますが、『忙しくて5日間も面倒を見る余裕がない』などと断られることもありました」(伊勢先生)

今田中学校とは対照的に、校区に都市部を含み、07年度は207名の2年生が在籍していた西宮市立大社中学校では、受け入れ先は実に72

「トライやる・ウィーク」は、事前準備↓事

**事前指導は平均11・6時間
生徒自らアポイントをとる**

です。3日目に職場に慣れ、4、5日目にやっと自分から動くようになる。達成感や自分が成長したという感覚を生徒自身が得るには、5日間という日数が必要ですよ」と説明する。

期間中は宿題を出さず、部活動も行わず、またできる限り塾や習い事も休んで、家族で話す時間を設けるように指導する。自分自身や仕事、社会についてじっくり考えさせ、教育効果を高めるための工夫だ。そのねらい通り、保護者へのアンケート(06年度、3万8395人を対象)で「期間中、この活動について子どもと話し合った」という回答は87・5%に上る。

いて決めるが、「希望が通らないと、意欲が減

更には、生徒の第1希望を優先させたいという

校区外に受け入れ先を求めました」

りました。生徒にとって慣れた環境よりも新しい

元々住民同士のつながりが強い地域のため、受

け入れ先に生徒の顔見知りがあることもよくあ

りました。生徒にとつて慣れた環境よりも新し

元などの仕事を体験させていました。しかし、

十六先生はその理由をこう話す。

「以前は校区内に数多く存在する丹波焼の窯

所だ。「トライやる・ウィーク」担当の伊勢三

先の確保だ。山あいにある小規模校の篠山市立

今田中学校には、07年度は43名の2年生が在籍

26か所の受け入れ先のうち半数は、07年度に新

たに探し出した。その多くは校区外にある事業

前指導↓実施↓事後指導の流れで進められる。

事前準備としてまず着手するのは、受け入れ



写真1 お茶の販売店で作業する今田中学校の生徒。「トライやる・ウィーク」の腕章を見た地域の人から「頑張ってる」と声をかけられることもあるという

退することが多い」(伊勢先生)という。同校

の校区内では職種が限られ、生徒の希望にかな

う受け入れ先がなかなか見つからなかったのだ。

07年度は伊勢先生が前任校で依頼していた受

け入れ先を中心に連絡したため、比較的容易に

決まった。しかし、事業開始当初は受け入れ先

の確保にかなり苦労したと振り返る。

「推進協議会の委員や卒業生、保護者など関

係者の協力を得て確保しました。教師の多くは

校外に出る機会が少ないですから、教師にとつ

てもまさに『トライやる』です。丁寧に趣旨を

説明すれば多くの事業所は協力してくれますが、

『忙しくて5日間も面倒を見る余裕がない』な

どと断られることもありました」(伊勢先生)

今田中学校とは対照的に、校区に都市部を含

み、07年度は207名の2年生が在籍していた

西宮市立大社中学校では、受け入れ先は実に72

特集 3

兵庫県「トライやる・ウィーク」に学ぶ
職場体験の実践ポイント

か所に上った。「子どもを地域に帰す」を主眼に、その大半は校区内にある。職種の希望が通らない生徒もいるというが、「トライやる・ウィーク」担当の丸林弘幸先生は次のような指導を通じて、生徒の意欲を高めている。

「近所のパン屋さんはどういう仕事をしているか知っている？」と聞くと、多くの生徒が答えられません。「学校の近くにも皆が知らない仕事はたくさんある」と関心を引き出し、自分が住む地域にはさまざまな職場でさまざまな人が働き、自分たちの生活が成り立っていることに目を向けさせるように努めています」

各校とも事前指導に力を入れる。06年度、事前指導に費やした時間数は、全校平均で11・6時間（図1）。事前指導では、趣旨説明や希望調査、受け入れ先への事前訪問、マナー指導などを行う。今田中学校では、実施1週間前に生徒が受け入れ先を事前訪問するが、その際には生徒自ら電話でアポイントを取る。電話のかけ方を学ばせると同時に、心の準備をさせるためだ。訪問先でのルールやマナー、トラブルへの対応も指導するが、具体的な仕事内容には詳しく触れない。

「生徒が自ら考える余地を残すようにしています。予期せぬ出来事や叱られる体験から、生徒は社会の厳しさを知るので」（伊勢先生）

期間中の電話対応は保護者が協力

期間中も過保護になりすぎないよう心がける。「教師は挨拶を兼ねて、最低1回はすべての受け入れ先を訪れます。ただ、仕事内容や指導方法は受け入れ先に任せていますし、生徒に独力で取り組ませるためにも、必要以上に顔を出さないようにしています」（伊勢先生）

大社中学校では保護者の協力を得ることで、実施期間中の教師の負担が軽減している。例えば、毎日の活動終了時に生徒から確認の電話が入るため、期間中は特別電話を設置している。教師は受け入れ先の訪問などに追われるため、電話対応は保護者ボランティアに任せている。受け入れ先でのトラブル防止も重要だ。兵庫県教育委員会は受け入れ先での怪我や器物破損に備え、保険に加入する。これは、活動中の事故などを恐れて受け入れを断る事業者への説得材料としての効果もある。

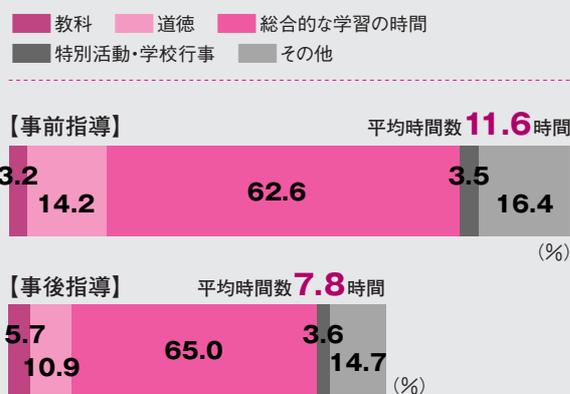
「体験だけ」で終わらない事後指導 約半数の生徒が再訪問

事後指導では、感想文集や礼状の作成、実践発表会が大半の学校で実施される。一過性の取り組みで終わらせないための工夫としては、「トライやる」アクションが挙げられる。兵庫県教育委員会は、活動終了後の受け入れ先への訪問や、地域行事への参加を推奨している。

「半数近くの生徒は土日や長期休業中に受け入れ先を自主的に訪れています。このほか、介護施設のボランティアや祭りの企画運営、共同募金なども行っています」（丸林先生）

職場体験を通して生徒はどう変わるのか。

図1 事前・事後指導の平均時間数と指導の領域
(06年度、370校の統計)



○兵庫県が公立中学校に調査を行った結果、事前・事後指導共に、その6割以上は「総合的な学習の時間」が充てられていた。次は「道徳」で、教科学習ではほとんど行われていない。また、事前指導の時間（平均11.6時間）と比べて事後指導の時間（平均7.8時間）は少なめ。特に事前指導に力を入れていることがわかる

「普段は口数の少ない子が声を張り上げて接客するなど、環境が変わると別人のように振舞う生徒を多く目にします。本人すら気付いていなかった新しい可能性が開花するのを目の当たりにします」(伊勢先生)

実際の進路に結び付くケースもあると、大社中学校の土井宣人先生は話す。

「介護施設で体験をした卒業生が福祉系の大学に進むなど、『トライやる・ウィーク』が進路に結び付いたケースをしばしば耳にします。直接的な影響はなくても、この体験が進路を考える上での足場になっているのを実感します」

事業の最大の目的である「心の教育」についての効果を測ることは難しい。ただ、学校や生徒と地域とのつながりが深まったことや、実施期間中に生徒と保護者の会話が増えたことなどから、他人に敬意を払う気持ちや自己効力感が高まった等の効果があったという。また、不登校生徒の減少という効果も表れている。

「教師の働きかけにより、不登校の生徒の半数ほどが『トライやる・ウィーク』には参加します。更に、そのうちの4割ほどは活動後の登校率が上昇しています」(松尾中学校教育係長)

新しい環境に飛び込み、驚き、戸惑い、自分の頭で考えるからこそ、生徒の心に刻み込まれるものは大きい。取材で出会った教師の大半が「活動後は生徒の顔つきが変わる」と口をそろえたことが、この取り組みの効果の大きさを端的に示している。

10年間の実践で蓄積された **職場体験学習を成功に導くヒント**

* 取材を基に「VIEW21」編集部が作成

生徒への働きかけ・指導

過度の事前指導はマイナス効果

・生徒が自ら考える余地を残すことが大切。予期せぬ出来事に対処する経験が問題解決力を育む。

職種の希望がかなうとモチベーションは高まる

・将来、就きたい仕事の職場体験は生徒の意欲を格段に高める。可能な限り、生徒の希望をかなえる。

アポイントメントから生徒に携わらせる

・準備段階から生徒に携わらせることで心の準備が整う。電話のかけ方や依頼状の書き方なども身につく。

最低1回は教師が訪問

・挨拶を兼ねて活動の様子を視察。ただ、必要以上に顔を出すのは避けたい。受け入れ先の指導を信頼することも大切。

報告会は大切に

・学んだこと、感じたこと、失敗などをしっかり振り返らせる。それを互いに発表し共有することで、学びは更に深まる。

一過性に終わらない活動を心がける

・活動終了後も生徒を訪問させると、継続的な学びを得られる(兵庫県では「トライやる」アクションに該当)。

制度づくり・外部との連携

実施時期は発達段階や学校行事などを考慮

・生徒の発達を考慮すれば、数か月でも遅めに実施した方が得られる学びは大きい。特に秋は行事と重なりやすい。

時間割の調整

・丸5日間、30時間近く授業を行わないため、実施直前・直後にしわ寄せがこないよう、早めに時間割やスケジュールを調整する。

受け入れ先の確保には地域関係者を巻き込むと協力を得やすい

・商工会やボランティア団体の代表者などを巻き込み、事前に関係者に趣旨を説明してもらう。

学校全体での窓口担当者を設ける

・年度の変わり目や学年団の変更などで引き継ぎがスムーズにいかないことがよくある。学校全体で組織的にやり取り、ノウハウを共有する。

保護者への趣旨の周知を徹底

・授業時間が減ることに不安感を抱く保護者は必ずいる。保護者の協力があれば、生徒の学びの効果も高まる。

受け入れ先とのコミュニケーションは対面で

・受け入れ先とは電話やファックスでのやり取りが多くなるが、対面でのコミュニケーションでこそ活動のねらいや教師の情熱が伝えやすい。

受け入れ先にはお礼だけでなく教育効果を伝える

・引き受けたかいがあったと思うことで、翌年以降も快く協力してくれる可能性が高まる。

受け入れ先とは長期的な視野で関係を構築

・学校の情報を継続的に提供し、学校の「応援団」になってもらえば、職場体験以外でも協力を得られるようになる。

事前準備・事前指導

実施

事後指導

学問に情熱を燃やし続けた 先人の想いを解き明かす

M A S A A K I

日本学士院長

久保正彰

戦後、日本人として初めてハーバード大学を卒業し、日本における西洋古典学の地帯を切り拓いた久保正彰教授。東京大に西洋古典学の研究室をつくり、世界的な拠点に育て上げた業績は大きい。70歳を過ぎてなお学問に情熱を燃やし続ける久保教授に、多くの師との出会い、学問の魅力についてうかがった。

「文字」と「人」のかたちを学ぶ学問

私が15歳のときに戦争が終わりました。これからどうなっていくのか、焼け野原の中でだれにも見通しが立たないという状況でした。そうした中で、私が自分を見失うことなく、進むべき道を見定めることができたのは、自分の中によりどころとなる基本を培っていたからではないかと思っています。

小学1年生のころ、神戸市内にあった剣道の道場に通い始めました。小さいころから本ばかり読んでいた私のことを両親が心配して、体を鍛えさせようと考えたのです。この道場の指導が変わっていました。練習開始の1時間前に道場に入り、まず習字をします。うまく書けるようになるまで、一つの字を何週間もかけて練習するのです。1時間ほどで習字が終わると、今度は道場の端に座らされます。そして、ほかの子どもたちが木刀を構える姿をひたすら眺め、「型」を覚えるのです。

道場で学んだことは、私のルーツになっていると思います。人文科学は「文字のかたち」「人のかたち」を学ぶ学問です。世の中に美しい「文字」や「人」のかたちがある、それには手本となる「型」があるとい

うことを、幼少期に心に刻みつけられたのは貴重な体験でした。

彫刻の娘が語る言葉を聞きたい

思い返せば、私は人生の節目節目で、学問に情熱を燃やす多くの先生方と出会い、その方たちから叱咤激励を受けながら、進むべき道を模索してきたように思います。

中学（旧制）1年生のころに学んだ家庭教師の先生もその1人でした。大阪高等学校（旧制）に通う学生でしたが、この人が大のフランスかぶれ。教科書はそっちのけで、来る日も来る日もデカルトやポアンカレ（注）の話ばかりをするんです。自分が高校で習ったことを一生懸命教えてくれたのですが、広い世界に情熱を燃やし続けるお兄さんの存在は、私の心に深く刻まれました。

終戦後は、東京の中学校に編入し、そこで有名なドイツ語学者の倉石五郎先生に学びました。1週間かけて教科書の和文独訳の演習問題を解いて持っていくのですが、先生は赤字で×をつけてくれるものの、それ以上は何も教えてくれません。どう直せばよいのか、正解は自分で考えろというわけです。勉強は自分でするもの、それが当たり前の時代でした。

ハーバード大学では、初め、数学を専攻しました。戦争に負けようが、国が減じようが、数学だけは不滅だと考えたのです。そんな私が西洋古典学を志すようになったのは、ボストン美術館で古代ギリシャの彫刻家プラクシテレスが彫った少女の像を見たことが一つのきっかけです。ギリシャの女神像はたいがい怖い顔

注 19世紀フランスの数学者



をしているのですが、その像は違いました。少し唇を開き、何か語りかけているように見えたのです。その瞬間、私は「この娘の語る言葉を聞きたい」と思いました。

ハーバード大学では素晴らしい先生方にめぐり会い、そこで「文字のかたち」「人のかたち」を改めて学び直しました。それ以上に私の心を打ったのは、先生方の学問にかける情熱です。戦争で国を追われてもなお、命がけて学問を守り続けようとする先生方も多く、その姿から、学問の偉大さや尊さ、難しさのすべてを学びました。

学問の「息づかい」を感じる喜び

ときには、何百年も前に亡くなった、名もない学者から教えられることもあります。10年ほど前、古書店でギリシャ語によって書かれたホメロスの版本を偶然見つけました。アルドという有名な学者の手による『イリアス』『オデュッセイア』で、1517年に印刷された本です。本自体にも非常に価値があるものですが、私が心惹かれたのは、余白にびっしり書き込まれたメモの方でした。この書き込みをした人はどのような目的で、何を明らかにしようとしていたのかということに興味を持ったのです。

くぼ まさあき 1930年広島生まれ。アメリカ・ハーバード大学卒業、東京大学院人文科学研究科修士、成蹊大文学部助教授、東京大文学部教授、同名誉教授、東北芸術工科大学長などを歴任。07年10月から日本学士院長を務める。04年、瑞宝重光章受章。現在、諸国学士院協賛の下に進められているラテン語の大辞典の作成に参与する。主な著書に『ギリシア・ラテン文学研究』（岩波書店）などがある。

海外の研究者の力を借りながら、8年の歳月をかけて、ようやく最近、メモの全貌をつかむことができました。メモを書いたのはヤコブス・ホイエルという無名のオランダの学者でした。ホメロス学は18世紀中ごろから盛んに行われるようになりましたが、ホイエルはそれより100年も前に研究に取り組んでいたことがわかりました。ホイエルは余白にメモを書き込むだけでなく、印刷されたテキストに語句を補ったり、文章に区切りを入れたりしていました。その数、ざっと2000か所。古い本というのは、何度も手書きで写されていく間にどんどん原本から遠ざかり、劣化していくのが常です。ホイエルは自分の判断と理解に基づいてそれを修正し、「古いホメロス本の輝き」を再現する努力を重ねていたのです。

若い研究者や学生の中には、私の研究に対して「そんなものは道楽だ」という人もいます。でも、私はこれこそが「学問」だと思います。ここには、学問が始まるときの息づかいがあります。それを見つめることは、学問を志す者の喜びです。我々の学問は、すぐに花開くものではありません。大きな世界の中で、真実の光を見つめようと努力を続けることが大切であり、それによって学問への情熱は絶えることなく、次代へ引き継がれていくのです。

◎本コーナーに登場する研究者は、日本学士院の会員の方です。日本学士院は、学術上功績のあった科学者を優遇するための機関で、人文科学70名、自然科学80名が在籍し、新会員の選定、公開講演会等の活動を行っています。会員に選定されることは研究者として名誉とされ、また日本学士院賞は国内の学界では最も権威ある賞として、毎年初夏に行われる授賞式には天皇皇后両陛下がご臨席されます。 <http://www.japan-acad.go.jp/>

フィンランドメソッド第一人者に聞く

子どもたちの

読解

の力を育てる
フィンランドの授業

教科書編纂者・元ヘルシンキ大学附属小学校教師 **メルヴィ・バレ** Mervi Wäre-von Hedenberg

2003、2006年のPISSAで、世界トップクラスの成績を上げたフィンランド。

特に「読解」の指導法は各国の注目を集める。同国の学習指導要領執筆者で、国語の教科書執筆も手がける元ヘルシンキ大学附属小学校教師のメルヴィ・バレ氏に、フィンランドの教育についてうかがった。



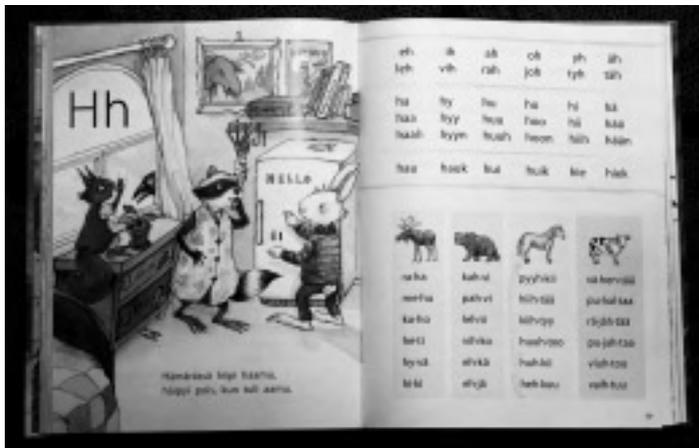
メルヴィ・バレ◎教科書編纂者・元ヘルシンキ大学附属小学校教師。教科書制作を通して海外の先進的なメソッドをフィンランドに導入すると共に、指導要領策定委員や広域教育委員などを歴任。現在のフィンランドの教育方法の原型を作った。現場を退いた今も各地で精力的に教員研修を実施。同国の80%の教師が使用するヴェルネル・ソードルストローム（WISOY）社の初等国語教科書の責任監修者として活躍中。

読解の第一歩は「事実」と「意見」の区別

私たちは「読解」の要点は次の三つだと考えています。一つめは、すべての学習の基礎となるように、きちんとテキストを読みこなす力をつけること。二つめは、批判的に物事を判断する力を身につけること。インターネット上の情報の読み取りなどがこれに当たります。そして、三つめが問題解決能力を身につけることです。

この三つの力を育てるために、まず行うのは「事実」と「意見」の区別を子どもにも教えることです。批判的な読みをするにしても、問題解決をするにしても、ここが出発点になりますし、子どもが未来の社会で生きていく上でも一番重要な力になると思います。テレビ、新聞、雑誌、インターネット、溢れんばかりの情報の中から、何が真実なのかを見極められなければ、今後の社会では通用しません。フィンランドでは、小学校段階からこの点を意識して教育を行っています。

もう一つ大切にしているのは、生活体験や現実感覚に基づいてものを考える力を養うことです。例えば、算数の授業で、子どもに家族の身長を求める問題をつくらせるとします。その際、間違っても、お父さんの身長が15センチになるような作問をしてはいけません（笑）。計算上はあり得ても、あまりにも現実



フィンランドでは、教科書の挿絵を「読み取る」活動も頻繁に行う。例えば、写真のように、挿絵を見ながら登場する動物の特徴を表現させ、友だちに何の動物かを推論させる活動などがある

的ではない答えが出ては、これまで見聞きしたこと、考えたことを踏まえながら、答えの正しさを考え直す、という作業をさせることができません。

私たちがすべきことは、機械的に答えを出す術を教えることではなく、一度出した答えに対しても「なぜそう考えたのか」「その答えは現実的なのか」と、自らに問いかける力を育てることです。PISAの問題はこうした考え方に似ているので、日頃からトレーニングを積んだフィンランドの子どもには取り組みやすかったでしょう。

「なぜ」「どうして」を繰り返す フィンランドの授業

私たちがどのような授業をしているのかを、具体的に紹介しましょう。おとぎ話を題材にした小学校低学年向けの授業を例に挙げます。私たちはいきなり本文を読み始めるということはありません。タイトルと表紙の挿絵を子どもに見せ、日本語の「むかし、むかし……」に相当するフレーズまで読んだところでいったん授業を止めます。そして、「さあ、これから始まる物語は本当のことかな？ それともおとぎ話かな？」と子どもに問いかけます。

多くの子どもは、すぐに「おとぎ話だ」と気がつきますが、肝心なのは子どもがなぜそう考えたのかを問うことです。「いろいろなお話を聞いたことがあるけれど、おとぎ話は『むかし、むかし……』で始まったよ」と答える子どもがいれば、経験を基にした推論ができていくということになります。

更に話を読み進め、登場人物が店に入るシーンが出てきたとします。ここでも本文の読解に入る前に、「みんなは、どんな店に、いつ、だれと、どうやって、何をしに行ったことがあるかな？」と、いったん子どもたちの生活体験を問う作業を入れます。こうした作業を一度入れることで、その後、本文の読解を進める際に、「ここまでではこういう話だった。自分の経験に照らすと、だいたいこういうときはこ

うなった。だからこの物語もこうなるのではないか」という具合に、本文の内容と自分の体験とを結び付けて推論できます。

もちろん、物語の続きは常に予想通りに進むとは限らないですし、ときとしてあまりにも現実離れたストーリーを予想する子どももいます。そうしたときにも「なぜそんなことを言うの！」と叱るのではなく「どうしてそうなると思ったの？」と問いかけます。

また、日本ではあまり行われていないのですが、教科書の挿絵を使った活動もよく行います。挿絵は単なる「飾り」ではなく、「読む」ためのものです。子どもに絵から読み取れたことを列記させていくこともありますし、絵を基に非常に長い物語を考えさせ、ドラマを演じさせることもあります。それが難しい子どもがいたら、「私にはしつぽがあります、耳が長いです」など、挿絵に描かれたキャラクターの特徴を言わせて、クラスのみんなに、その子がなりきっている登場人物を当てさせる、といった活動をすることもあります。このように、教科書からでも、推論する力を育てる手立てはいくらでも見つかるはずですよ。

「メソッド・ガイド」で 一定の指導を確保する

しかし、全くの新人教師にとって、こうした授業をゼロから組み立てるのは容易なことではありません。そこで私たちの国では、ベ

テラン教師の経験知を、合理的な「メソッド（方式）」にすることに力を入れています。

例えば、先ほど紹介したような、子どもへの発問の仕方や授業の進め方は、教科書に付属している指導書に非常に詳しく書かれています。子どもにも発問するタイミングや内容、子どもの答えに応じた返答のパターン、更には宿題の出し方や成績のつけ方に至るまで、単元ごとにきめ細かくフォローしています。

更に、教科書には、そのままコピーして使えるプリント教材をまとめたワークブック、CD-ROMが一つのパッケージとしてついています。ワークブックの巻頭には習熟度を測るためのテストがついており、そのあとに単元別に習熟度に応じた課題プリントが続く構成になっています。この流れに従っていくことで、テスト→習熟度によるグループ分け→子どもに与える課題の提示まで、どの教師でもこなすことができます。

一方、教科指導やクラス運営のごく基本的な方法については、メソッド・ガイドと呼ばれる冊子を参照することになっています。メソッド・ガイドとは現場の教師の知見を集めたもので、国家教育委員会が基本メソッドを示したガイドと、それに従って各教科書会社が自分のところの教科書に合わせてメソッドを細かく具体的に説明したガイドの2段階があります。そこには、「子どもが騒いでいるときに落ち着かせるにはどうすればよいか」「子

どもがおかしな答えを言ったときには『違います』と言わずに『なぜ』と聞き返す」といったメソッドが蓄積されています。

あまり知られていないかもしれませんが、フィンランドの学習指導要領は非常に簡潔なもので、極端にいえば、ただ教育目標が列記されているに過ぎません。また、教科書検定もありませんから、教師はどの会社の教科書をおおうと自由です。そうした中で、一定の指導力を確保するためにも、こうしたメソッドは欠かせないのです。

「Learning to learn」や「ベースに知識を教える」

私は教科書やメソッド・ガイドの執筆を長年続けてきましたが、その間に考えていたのは「1980年代までのフィンランドの教育をなんとか変えたい」ということです。かつてのフィンランドの教育は、今考えると恥ずかしいくらい画一的な方法で行われていました。私自身「みんなで教科書をきちんと読みましょう」、「先生が示したところを順番に読みましょう」、「何が書いてあったかわかった人は手を挙げて」という授業をしていました。

しかし、あるとき気がつきました。子どもはどのように答えれば先生が満足するのかだけを考え、それに沿って覚えていることを口に出しているだけなのではないか——。要は、子どもが全く頭を使わない授業になってしま

っていたのです。だからこそ、この教え方ではだめだと思い「教え方の改革をしなければ」と強く思ったのです。

もちろん、物事を考えるためには、最低限の基本的な知識や概念を知っていることが必要です。しかし、「考える」と「知識を習得する」ことは、本来は隣り合わせのような概念です。「まずは知識をしっかりと覚え、それから考える」という仕方には賛成できません。実際、フィンランドの学習指導要領では、「何をどのように学ぶか」が最大の問題であり、量をこなすことが問題ではないという点を強調しています。勉強の進め方に沿っていうなら、まずは「どのように学ぶか」を教え、その次に「どのように問題を解決するのか」という方法と、実際にそれを使うことを教えます。あくまでもこの二つが重要で、知識を身につけるのはその次の段階です。

フィンランドでは「Learning to learn」という考え方が根底にあり、知識はそのために必要なもの、という捉え方をしています。

日本の教師の熱意と経験を洗練されたメソッドに

日本でも、学習指導要領の改訂を受け「読解」に対する関心が高まっていると聞いています。2007年11月に、関西地区を中心に日本の学校を訪問しましたが、「なんとかして教育を良くしたい」と先生方が真剣に考えて

特別取材

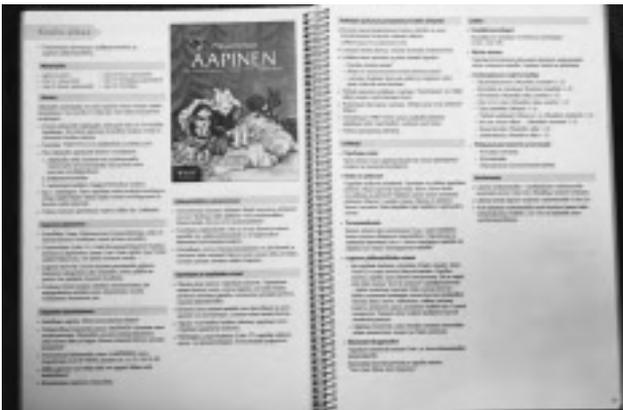
子どもたちの「読解」の力を育てる フィンランドの授業

図1 教科書、指導書、ワークブック



メルヴィ・バレ先生が執筆したWSOY社、小学2年生国語の教科書。左から教科書、ワークブック、教師用の指導書。このほか授業で使う素材を集めたCD-ROMなどがセットとなって、学校で活用される

図2 教師用指導書



教師用指導書。単元に応じた授業の進め方が詳細に示される。子どもへの質問例やそのタイミング、それに対する解答例と教師の返答、更に宿題の出し方などが例示される

図3 WSOY社 教科書付属のワークブック



子どもが取り組む課題などは、ワークブックにあらかじめ収録されている。同じ単元でも習熟度に応じて何パターンもの課題があり、子どもの自習教材としても使用できるようになっている。また、教科書の登場人物をかたどったシールなども用意され、ドラマを取り入れた授業などに活用できる

いること、そして新しい教育方法を熱心に学ぼうとする先生が大勢いらっしゃることに驚きました。こんなに強い思いは、世界中どこでも感じたことはありません。授業の事前準備をしっかりと行い、自作のプリントを用意してくる先生。黒板にどのように書くか、板書計画をきちんと立てている先生。私は日本語は理解できませんが、そのくらいのことはずぐわかりました。ここまで一生懸命な教師は、フィンランドにはほとんどいないでしょう。

ただ、授業をいくつか見るうちに「なぜ今この活動をしているのか」ということを深く突き詰めずに進む授業も多いことに気がつきました。例えば、子どもを静かにさせるのはとても上手なのに、静かにさせるだけで終わってしまい、肝心の子どもが全く頭を使っていない授業が見受けられました。

また、子どもに一齐に音読をさせる形式の授業では、読み始めた瞬間に、40人のクラスのうち10人くらいの子どもが、明らかについていけない状況が見られました。一律のスピードについていけない子どもは、文字を目で追っているだけで必要な学習ができませんし、逆にすらすら読む力がある子どもにとっては、無意味な学習の時間になってしまいます。私なら、黙読のあとに、「1人で課題に

取り組む『力のある子』のグループ」、「グループでなら課題に取り組むことのできる子」のグループ」、そして、私が「『つきっきりで読み方を教える』グループ」の三つに、クラスを分けていたと思います。

日本の先生方の「すばらしい教育をしたい」という思いを子どもたちの力に変えていくためには、明確な目的と「具体的にどうすればよいのか」という手立てを持つことが大切です。経験を集約し、合理的なメソッドとして洗練させていくことで、今後、日本の先生方の熱心な力を最大限に生かしていくことができるかと期待しています。

地方分権時代の 教育行政

地方自治体の学校教育への
新たな取り組み

岡山県 総社市

小学校英語へのサポートを軸に 小中連携を深化させる

1960年代から国際理解教育に力を入れてきた総社市。現在、その取り組みは幼稚園や小学校にも広がり、中学校英語へのスムーズな接続を図っている。中学校による小学校英語へのサポートをきっかけに、小中連携の動きも本格化させている。

小・中学校の教師が共同で 日英併記の指導計画を作成

吉備王国の中心として栄えた総社市は、古代の城跡や古墳が点在する遺跡の宝庫である。その恵まれた環境を教材として、故郷への理解や愛情を育む「ふるさと教育」は、総社市の教育の大きな特色となっている。その教育と並行して力を入れているのが、国際理解教育だ。総社市教育委員会（以下、市教委）学校教育

課の上岡仁課長は、次のように説明する。

「まずは自分の故郷を愛することが、世界中の人々がそれぞれ故郷を持つているということを理解する気持ちにつながるのではないのでしょうか。そうした考えから、ふるさと教育の一環として国際理解教育を推進してきました」

その取り組みは、1960年代に市内の中学校に岡山大の留学生を招いて交流を始めたことに遡る。「ALT（外国語指導助手）」という言

葉すらなかった87年には、市独自に外国人助手として数名を採用。2001年度には、ベルリッツ岡山の協力でベネッセコーポレーションが組織した3名のALTが英語の授業に入るようになり、小学校（年間3～5日間）と幼稚園（同1～3日間）でもALTによる国際交流が始められた。

「大切にしているのは、『人』の魅力によって英語に興味を持たせることです。指導の技術よりも、楽しく歌ったり踊ったり、休み時間に一緒

に遊んだりできるコミュニケーション能力を重視してALTを採用しています」

05年度には、市の教育研修所に「小学校英語研究委員会」を設置。小・中学校から担任や英語教師を1名ずつ選出し、計19名の委員が推進計画やカリキュラムなどを検討する。ここで、低学年では10時間、中

高学年では20時間を英語活動に充てることを決め、同委員会によって年間指導計画がつくられた。

概略

■岡山県総社市

人口約6万8000人。古代吉備王国の中心として栄え、市内には古墳や古代山城をはじめ歴史的遺産が点在する。瀬戸内地域特有の温暖な気候に恵まれ、果物などの生産も盛ん。郷土文化への理解を通じた人権教育や環境教育にも力を注ぐ。市立小学校15校、市立中学校4校。

【総社市教育委員会】

〒719-1192 岡山県総社市中央1-1-1 TEL 0866-92-8358

URL http://www.city.soja.okayama.jp/kyoiku_bunka/kyoiku/kyoiku_iinkai/kyoiku_iinkai.jsp

図 小学5年生の年間指導計画

小学5年生の1回目の指導案。「ねらい」「教材・教具」「授業計画」の項目に分け、それぞれ英文と日本語で書かれている。1年生～6年生まで、毎時の指導計画がつけられている。

Lesson Plan 1 (レッスン案・1)

Year5 (5年生)

Objectives:

- ☆able to introduce oneself
- ☆enjoy the song, and able to use a basic conversation at restaurant

Materials:

- HRT prepares:
- ALT prepares:

Plan:

1. Greetings

"My name is ~. Nice to meet you.
Nice day, isn't it? Yes, it is.

2. Song :

3. Warm up : Action English.

"Sit down, Stand up, Jump, Dance, Hop, Skip, Touch your head etc."
ALT will say the command. Students will repeat the command and do the action.

4. Introductions

Demonstration :

ALT : My name is _____.
Nice to meet you.

HRT : My name is _____.

Nice to meet you, too.
(shake hands)

ALT : Nice day, isn't it?

HRT : Yes, it is.

Practice 1 :

The students will repeat the dialogue after the ALT. Volunteers demonstrate at the front of the classroom.

Practice 2 :

Students introduce themselves to as many students as they can in 2 or 3 minutes.

ねらい:

- ☆自己紹介ができる。
- ☆デザートをつかった歌を楽しむことができ、レストランでの基本的な会話ができる。

教材・教具:

- 担任が準備するもの:
- ALTが準備するもの:

授業計画:

1. あいさつ

「私の名前は～です。お目にかかれて嬉しいです。」
「いい日ですね。」「はい、いい日です。」

2. 歌:

3. ウォームアップ:動いてみよう

「座る、立つ、ジャンプする、踊る、びよんびよん飛ぶ、スキップする、頭にさわる」
ALTが指示をするので、児童は、その指示を繰り返し言い、指示の通りに動く。

4. 自己紹介

見本

ALT : 私の名前は _____ です。
お目にかかれて嬉しいです。

担任 : 私の名前は _____ です。

私もお目にかかれて嬉しいです。
(握手する)

ALT : いい日ですね。

担任 : はい、いい日です。

練習1:

児童は見本のダイアログをALTの後について言う。何人かの児童は前に出てダイアログを言う。

練習2:

児童は、2～3分の間にできるだけ多くの他の児童に自己紹介をする。

レーションのカリキュラムを基にして、中学校と小学校の教師が原案を作成し、ALTがチェックするといふ流れでつくられた。その特徴は、毎回の学習の流れや教師の発言を日本語と英語で併記していることだ(図)。これにより、英語の授業に慣れない教師でもALTに頼りすぎることなく指導できるようになったと

05年度からは、英語活動において小中連携が始まった。公立中学校4校のうち2校の中学校区を推進地域に指定し、小・中学校の教師が互い

英語を教える楽しさを 小学校の授業で呼び戻す

いう。

の英語の授業を見学し合うことから始めた。07年度には、中学校の英語教師がチームティーチングとして小学校の授業に参加。市教委は、小・中学校が連携を深めることで、もともと多忙な中学校教師に過剰な負荷がかからないように英語教師を増員した。

該当する中学校は、小学校の英語

活動の時間割を確認してから中学校の時間割を組んでいるため、英語の授業や小学校への移動時間などを考慮した無理のないスケジュールを立てることができよう。こうした配慮によって、中学校の英語教師は、小学校の授業に週1回程度と比較的高い頻度で参加できるようになっている。

授業は小学校の担任が主導し、中学校の英語教師はALTと共に発音などのアドバイスに徹する。



総社市教育委員会
学校教育課課長
上岡 仁
Uekawa Hitoshi

あくまでもサポート役であるため、指導案をつくったり、教材を用意したりといった負担が少ない。

また、小学生は歌やゲームに一生懸命に取り組む傾向にあるため、中学校の授業とは異なる雰囲気をもつ小学校での授業を心待ちにする中学校の教師も多いという。

「中学校の教師には、文法などを教えようとする意識が強くあるようですが。しかし、小学校英語では、子どもが英語の楽しさを感じることも主眼となります。小学校の指導に触れることで、中学生に対しても英語の楽しさを伝えられるような指導をしてほしいと思います」(上岡課長)

地域ボランティアを採用して英語教育の充実を図ることなどの課題はあるが、「英語をきっかけとして、他教科や活動でも小中連携を進めたい」(上岡課長)というように、総社市の意欲的な取り組みは更なる進化を目指している。

